

---

# それは黒くて重かった

D.K.B.Y.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それは黒くて重かった

### 【Nコード】

N3682Y

### 【作者名】

D・K・B・Y・

### 【あらすじ】

王都から遙か北の村に、父親を亡くして母親と二人で暮らす少年が居た。父親の造ってくれた形見の鎧と、それを扱う鍛冶の技を幼い頃から仕込まれてきた少年は、それらを使いながら、父親の遺した言葉通りに己を鍛える毎日を過ごしていた。その傍らには、艶やかな毛皮の獣、黒炎が常に側に居て、共に楽しい生活を送っていた。ある日、少年と黒炎は、自宅への帰路で50代位の大怪我をした男を助ける。それは、少年の旅立ちから王都、学院へと続く運命の輪が回り始めるきっかけとなった。

## 序章（前書き）

これが初めての投稿になります。拙筆ですが暖かい目で見てくださいと嬉しいです。投稿のペースは遅いと思いますが、それに関しての突っ込みは無しにして頂けると助かります。

## 序章

ブンツブンツブンツ

何かを振っている様な音が規則的に響いている。その場には他に音を出すモノは無く、その音を聞いているのもまた、音を出しているモノだけではないかと、もしその場に第三者が居れば思っただろう。

「・・・ハツ・・・フツ・・・」

振りに合わせるように微かに聞こえる声はかけ声のようであり、ただの呼吸音の様でもある。その発信源は小さく、十歳位の子供と同じ位の大きさを黒くずんぐりとした体型をしている。手に持っているのは黒い金属製の棒で、身長と同じ位の長さのそれを軽々と、まるで剣の素振りをする様に振っていた。

呼吸に合わせて吐かれる息は真つ白く、その場がとても寒い場所であると主張している。陽が傾き、山の稜線に近付いてきている時間帯で気温も下がってきており、その山も、人影の周りも目に見える場所は例外も無く雪と氷に覆われているので、ますます寒々とした景色であった。

ここは、大陸の北、人が居住している最北端の村、ノースアタロスから山へと向かった先の森の入口付近である。険しい山へと続く登山道の入口には粗末な小屋が建てられており、山へ向かう人々の準備の場になると共に、村人達の狩りの拠点にもなっている。

人影はその小屋の傍らで一心不乱に素振りをしていた。

「ふう、そろそろ帰ろうかな」

人影から聞こえて来た声は、少年特有の高い声で、さっきまでの力強さとはかけ離れている印象を受けるだろう。この場に居て実際に見ていなければ声が人影から発せられたとはとても思えなかった。

人影、改め、少年は腕を回して大きく伸びをした後に小屋へと入る。小屋の中は暖炉からの熱で暖められており、過ごし易い温度に保たれていた。

「黒炎、汗拭いて着替えたら帰るよ」

少年は荷物の中からタオルを出しながら暖炉の方向へと声をかける。正確には、暖炉の方向ではなく、その前にある黒い毛玉(?)に向かつてであった。

黒い毛玉、改め、黒炎は少年の声に反応して、恐らく寝ていたであろう丸まった状態から首が持ち上がった少年の方を向く。

「ふにゃ、終わったのか・・・ふわあああ」

驚いた事に、黒炎という獣は人語を解して少年に返事を返し、大きな欠伸をしてから四足で起き上がる。細身の身体はしなやかな筋肉と艶やかな漆黒の毛皮に覆われており、優美な姿は見る者を感嘆させる。猫科の獣、黒豹の様な体つきにピンと立った三角の耳と狐の様なフサフサの尻尾、そして最も特徴的なのはルビーの様に紅く輝く瞳である。その身体を弓なりにして伸びをする様は実に気持ちが良いそうに見えた。

「ごめん、待たせたね」

「ホントだよ、毎日毎日よく飽きないな」

「ボクの日課だし、それに父さんと約束したから」

「そっか・・・とりあえずお腹空いたから早く帰ろ」

「そうだね、ボクもお腹空いちやったよ」

一人と一匹、お腹を押さえて笑いあう。まるで友達同士の会話、というよりも家族の様な暖かい空気が包んでいた。

ガチャ・・・ビューーーー

扉を開くと外は先程とは全く違った様子になっている。空は厚い雲に覆われ、辺りは真っ暗になっており、雪と風がとても強く吹雪いていた。

一人と一匹は顔を見合わせるとお互いに溜息をつく。

「あゝあ、吹雪いちやってるよ」

「ごめん、今日はもう少しの間、変わらないと思ってただけど・・・」

頬をかきながらすまなそうにする少年の足に前足を乗せて、黒炎は

首を振るように尻尾を横に振る。

「いいから、さっさと帰ろうよ。ポケットとしてたら凍えちゃうよ」

「・・・うん、急ごうか」

嬉しそうに微笑みながら黒炎の頭を撫でた少年は、黒炎を先に出すと小屋の扉を閉めてしっかりと施錠をする。

「火はちゃんと消したかい？」

「大丈夫、ちゃんと確認しておいた」

そんな事を話しながらも素早い足取りで村へと向かう。この辺りの積雪は深くなる為、積もる前にさっさと家に帰る必要があるからだ。黒炎の獣特有の素早い走りに遅れる事も無く、ずんぐりとした格好に荷物を持った少年は、その姿に似合わないスピードで並んで走っている。それは正に飛ぶような走りであった。

普通の大人が走るよりも数段早く村の明かりが見えてきた所で、唐突に黒炎が止まる。少年は数歩進んだ所で同じ様に止まった。

「黒炎、どうしたんだい？」

そう問う少年の言葉に返事をせずに、黒炎は村から街道へと下っていく方向へ鼻の先をピクピク動かしている。その様子に少年は何も訊かずに次の動きを待つ。

「血？・・・血の臭いがする」

「血の臭い？・・・大変だっ、誰か怪我でもしているのかもしれない」

「行くのかい？」

「あたりまえだよ、案内してっ」

「わかった」

そう言っ先程鼻の向いていた方向へ風のように走り出す。その黒炎に遅れずに走る少年の姿は先程までの走りとは全く別物の走りであった。

ザザザザッ

勢い良く走ってきた為、急停止するには少し余裕が必要であり、数歩分を靴底が地面を削る。

陽が落ちて暗くなり、吹雪もあつて視界が悪い中で怪我人を探すのは困難を要する。頼りになるのは黒炎の鼻の良さだけである。臭いで探す黒炎の背中を不安そうに見詰めながらついていく少年の頭や肩の上には早くも雪が積もり始めていた。

「居たよ」

同時に走り出した黒炎を追いかけながら最悪の結果には会いたく無いと願う。

前方に白い盛り上がりが見えてくる。雪の積もった大人一人分位の大きさの雪には所々赤黒い染みの様なモノが見える。その量は大怪我を予想させ、最悪の結果も考えなくてはいけないと覚悟させられた。

一人と一匹は手や前足を使い急いで雪をどかし始める。雪の中からは所々衣類が破れボロ布の様になった50代位の男性が出てきた。

少年は傷の様子を確かめながら、脈や呼吸を確かめた後に、ホツと溜息をつく。

「出血は酷く見えるけど血は止まり始めてる。

気絶して動かないけど、脈も呼吸もしっかりしてるから命には別状ないと思う。

「だけど早く運んで暖めないといけないのも確かだね」

「それは良かった、荷物は持ってやるから、その人を担いでいきなよ」

「うん、急ごう」

少年は荷物を黒炎の背中にくりつけ、自分は怪我人を背中に担いで立ち上がる。そのまま一緒に村へと走り始める。人間一人を担いでいる様には見えないくらい足取りは速かった。

村の入口、木の柵に囲まれた一角に大きな木製の門がある。その近くには守衛が詰めている小屋があり、窓からはランプの灯りが漏れている。外には寒そうにしながらコートに包まれた守衛の姿が見え、少年達の姿に気が付いたところで静止の声かけられる。

「ちよつと待った、一度門の前で止まれ」

言われた通りに立ち止まった少年達に向けて手に持っているランプの光を当てる。厳しく引き締められた守衛の顔はすぐに緩んで笑みを浮かべた。

「おお、お前達か、今開けるから早く入れ」

ギィ

同時に軋む音を立てながら門が開く。隙間に少年達は素早く入ると、門はしつかりと閉めなおされた。

「ありがとう、急ぐから、バイバイ」

「おい、どうしたんだその背中の子は？」

「怪我人を見付けたんだ、ウチに連れて行って手当てするから。」

何か聞きたい事があつたら明日ウチに来て」

まだ何か言いたい事がありそうな守衛の言葉を振り切るように再び足を速める。少年の家は村の東側、ちょうど門とは反対側の場所にある。村の西から東を貫く中央通りを走り抜けると、他の家と少し距離がある場所に一軒家があつた。

「黒炎、扉よろしく」

「あいよっ」

黒炎は一足先に扉の前に辿り着くと、器用に前足で扉の取っ手をひっかけて開く。室内の暖かい空気が逃げない様に、少年達は室内に入った。

カタン

深呼吸をして荒くなった呼吸を落ち着けているところで、部屋の奥から物音がする。少しして少年の母親らしき人物が現れた。

「おかえりなさい二人とも」

「ただいま」

少年達は同時に返事をしてから顔を見合わせて苦笑する。笑顔で二人の様子を見ていた母親は、少年の背中に誰かが背負われている事に気付く。

「あら、その背中の人はどうしたの？」

「あ、そうだ、この人、街道から村に続く道で倒れていて、酷い怪



我もしてるから連れて来たんだ」

「まあ大変、早く横になれる所に寝かせて手当てしないと」

「うん、僕のベッドに運ぼう。見かけはこんなだけど命には別状はなさそうだから心配しないで」

そう言つて少年は自分の部屋へと向かう。その後ろから黒炎がおとなしくついてきていた。

ガチャ

部屋の扉を開けて窓際のベッドへと近付く。

「ねえ、黒炎、このまま布団に寝かせてもいいのかな？」

「多分、高い確率でお前の母ちゃんに怒られると思うけど」

「だよね・・・」

そんな事を話していると扉が開いて母親が部屋に入ってくる。その手には救急箱が持たれていた。

「何やつてるのっ、早く暖炉に火を入れて部屋を暖めなさい。」

その人は、一旦、床に毛布をひいて寝かせておけばいいから」

母親の言う通りに床に毛布を敷いて怪我人を寝かせ、暖炉に薪を積んで火を点ける。火に風を送って強めていると、黒炎が側に寄ってきて身体を触れさせてくる。

「鎧脱がないと冷たいな、ついでに着替えた方がいいと思うよ」

カチャカチャカチャ

すっかり忘れていた事を指摘された少年は、留め金の音を立てながららくすんだ黒色の鎧を外して傍らに積み上げる。雪が積もっていた鎧の下には早くも水溜まりが出来ていた。それを見ながら後で拭いておかないといけないなと思う少年であった。

「綿入れ羽織つたらこっちを手伝って」

その言葉に母親の方を見ると怪我人の服を脱がそうと悪戦苦闘している姿があつた。ボロボロになつた服をそのままにしていたら手当ても出来ないし、身体も冷えるからである。

少年は母親と代わると服を次々と脱がす。母親は桶と湯と手拭いを用意して傷口を拭いて綺麗にする。ある程度綺麗になつたところ

で強いアルコールの地酒を吹きかけて消毒も行う。吹きかけた瞬間に怪我人はうめき声を上げていたが、気が付いた様子は無く、ぐったりとしたままであった。余分な酒を拭き取った後に母親の作った薬草の軟膏を塗り、清潔な包帯を巻いていく。最後に既に亡くなっている父親の寝巻きを着せてベッドに寝かせ、出血による体温の低下を防ぐ為に布団をかけた。

呼吸の安定している様子と苦しそうになっていない顔を見て母親は頷く。

「これなら大丈夫そうだね、目が覚めたら何か暖かい物でも食べさせればいい」

それを訊いた少年は安堵の息をつく。自分の診断でも大丈夫だとは思っていたが、第三者の見立ても聞くとは確かな物に感じられるからだ。

「良かった、母さんありがとう。後は僕が見てるから母さんは寝て良いよ」

「そう？だったら先に晩御飯を食べちゃいなさい。」

スープを温めれば食べられるから、黒炎も一緒に行ってきた」

「分かった、行ってくるよ・・・黒炎、行こう」

少年は扉を開いて黒炎を促すと台所に向かう。スープの鍋を火にかけるとパンに干し肉のスライスとチーズを挟んで皿に載せてテーブルへと運んだ。

「怪我が思ってたよりも酷くなくて良かった」

「ふふん、ボクに感謝していいんだよ」

「そうだね、黒炎が見付けなかったらどうなっていたか・・・お手柄だよ」

「スープ多めでよろしく」

「いいよ、ご褒美だからね」

得意顔になっている黒炎に、苦笑しながらスープ鍋の様子を見に行く。野菜と肉と牛乳の入った温かなシチューは美味しそうな匂いを漂わせている。二つの器にシチューを注いだ少年は水差しとグラス

を一緒に持つて戻る。料理を分けて、多い方のシチュー皿を黒炎の前に置き、水をカップと皿に注いで席に座った。

「いただきます」

声を揃えて言つてから食事を始める。お腹が空いていたらしく、すごい勢いで器の中身が無くなつていった。

「黒炎、シチューどうだった？」

「うん、もつと熱くても良かったよ」

「そっか、熱いのが好きだったもんね」

「やっぱりシチューは熱々が一番だよ」

そんな会話をしながら食事を済ませる。水を一気に飲んで一息つくとお腹を押さえて満足そうな顔になった。少年は食器を集めて流しで洗うと、怪我人用に水差しを持ち、黒炎を促して自分の部屋へと戻つていった。

ガチャ

濡らした手拭いで怪我人の額から汗を拭つていた母親は、扉の開く音に反応して顔を向ける。

「もういいの？ ゆっくりしてくれば良かったのに」

「いつも通りだよ、さあ、母さんもそろそろ寝ないと」

「そお？ それじゃあ部屋に戻るけど、何かあつたら呼ぶのよ」

「うん、わかつた、それじゃあおやすみ」

「おやすみなさい、黒炎もおやすみ」

立ち上がつて扉の方へと向かう母親に、黒炎も暖炉の前で横になりながら大きな尻尾を振つて挨拶をする。その様子を見ながら微笑んで部屋から出て行った。

黒炎は暖炉の前で再び黒い毛玉になり、少年は鎧を拭いて手入れをする。鎧はくすんだ黒色をしていて厚みもあり、ほとんど全身を覆う造りになっている。少年は身長も平均的で、引き締まつてはいるが細身の身体なので、全身鎧を着てあれ程の動きが出来る事が信じられる人間は少ないだろう。最後に素振りをしていた鎧と同じ素材の棒を拭いたところで、大きな欠伸が出る。眠そうに目に滲んだ

涙を拭った少年は、立ち上がって伸びをする。ポキポキと関節が鳴る音が身体の中に響くのを心地良さげに感じながら、眠気を飛ばすように深呼吸を何度かすると、怪我人の様子を見る為にベッドへ近付いた。

呼吸も落ち着いており、顔色もここに来た時点よりも良くなっていくようだった。額の手拭いを水ですすいで絞りまた戻す、この調子でいけばすぐに回復するだろうと少年はホッと一息ついた。

手入れの終わった鎧を定位置に片付け、父親の遺した覚書を読んでいるうちに、窓を覆うカーテンの隙間から朝日が漏れてくる。

「もう朝か・・・ふあああ」

次第に明るくなっていく窓を見ながら、欠伸をしていると、ベッドの上から声が聞こえてくる。

「・・・うつ・・・ここは・・・」

弾かれた様にベッドに向き直した少年の目の前で、怪我人が目を開いて周囲を見回しているようであった。答えを返そうと、少年は脅かさないように小さい声にする。

「ここはノースアタロス村の僕の家です」

その言葉に、初めて少年がそこに居る事に気が付いた様子で、怪我人の男は相手の顔を確認するように視線を向けてくる。

「君の家・・・どうして私はここに居るんだい？」

「覚えていないんですか？あなたは村の外で血塗れになって倒れていたんですよ」

「血塗れ・・・うぐっ・・・この身体の痛みはそれが原因だったのか」

痛みに顔をしかめた男は荒い息で起き上がろうとする。

「まだ無理はしないで下さい」

少年は上体を起こすのを手伝いながらたしなめ、男の背に枕を当てて壁に寄りかからせる。それから水差しからカップに水を注いで男に渡した。

「ゆっくり飲んで下さい」

「ありがとうございます」

礼を返して少しずつ水を喉に流し込む様子に、少年は食事も摂った方が良くと思い立ち上がる。

「スープを温めてきます。弱った身体には栄養のあるものを入れたほうが良いですから」

扉の方へと向かいながら黒炎の方へと視線を向ける。少年と男の会話で起きていた黒炎は、首だけ持ち上げて少年の方を見ていた。少年は、任せた、という意味の視線を向けており、黒炎もまた、任せられた、という意味の視線を返している。二人の絆の強さが成せる意思疎通であった。

スープを鍋にかけて温める。まだ固形の物をたくさん食べさせるのは早いと考えた少年は、スープから大きめの肉や野菜を除いて皿に盛った。

ガチャ

部屋に戻りベッドへと向かう少年の方を見ながら、男の視線は持っている皿に固定されている。匂いにつられて腹の虫が鳴っているのが少年にも届いているので、少々バツの悪そうな表情になっていた。少年はその様子を見て、身体は回復に向かって居ると確信できた。

「スープです、まだ身体は弱っているのでゆっくり食べて下さい」  
皿とスプーンを受け取った男が勢い良く食べ始めそうな気配を感じて、釘を刺す。男は照れくさそうにしながらゆっくりとスープを飲み始めた。

「美味しい、まるで生き返るようだ」

全くその通りだと思いつつ少年は苦笑する。

「ありがとうございます、母さんが聞いたら喜ぶですよ」

「君が私をここに連れてきてくれたんだろ？お母さん共々お礼を言わないとな」

そう言つてスープを味わいながら飲んでいる男の邪魔にならない様に黙ってベッドの横の椅子に座つて待つ。しばらくして食べ終わり

を見越してカップに水を注ぎ、造血作用のある薬草の粉末と一緒に男に渡した。

「これを飲んで下さい。出血が多かったので造血作用のある薬草です」

「ありがとう、人心地がついたよ」

薬草と水を飲み干した男は、大きく息を吐き出す。ひとまず落ち着いたようだと思った少年は、本題に入るタイミングだと考え、姿勢を正して男へと身体を向けた。

「あの、訊いても良いですか？」

「ん？なにかな、答えられる事なら何でも答えるよ」

微笑む男に安心した少年は質問を続ける。

「どうしてあんな場所で倒れていたんですか？」

「ああ、あれは私の考えが甘かった。

こつちへ来る途中の森で魔狼の群れに襲われてね・・・撃退はしたんだが途中で力尽きたんだ」

「えっ、魔狼に襲われたんですか・・・良く助かりましたね」

「まあそれなりに鍛えてるからね、しかし歳かな、このくらいで身体が動かなくなるとは」

「すごいですね、何をしている人なんですか？良ければ教えて下さい」

「構わんよ、私は王都の学院で学院長をしている者だ」

「えっ、学校の先生は皆こんなに強いんですか!？」

「あゝ、いや、ウチは特別でね、戦闘職を養成するための学院なんだよ」

「へっ、王都にはそういう学校もあるんですね」

驚きながらも納得した少年は、そんな所の学院長が何をしにこつちへ来たのが気になります。少しの間逡巡しながらも恐る恐るといった感じで聞く事にした。

「でもどうして学院長さんは、この村の方へと来たんですか？」

その質問に考える様子になった学院長は、少しして頷くと少年へと

目を向ける。

「別に秘密にするような事では無いからな。それに命の恩人には答えたい」

そう言つて笑みを浮かべて少年にウインクをする。年齢に合わないお茶目な様子に、少年も笑顔になった。

「私の目的は、この村に居る人物に仕事を依頼する事なんだよ」

「えっ、目的地はここだったんですか、それなら偶然でも見付けられて良かったです」

「ははは、本当だよ。神は私を見捨てなかったという事だ」

冗談めかして言う学院長はとても魅力的な笑顔を見せてくれ、年齢の離れた者とのこういつた会話の経験が無かった少年は不思議と違和感が無かった。

「この村の人だったら僕が案内しましょうか？」

「おお、それは助かる。動ける様になったら頼むよ」

「はい、それで何ていう人なんですか？」

「うむ、確か、ウォールとかいう鍛冶屋だったかな、村唯一の鍛冶屋らしいからすぐ分かるだろう」

「えっ……」

それを聞いた瞬間、少年の顔に悲しみ混じりの何とも言えない表情が現れる。それを見た学院長は、不思議そうに思った次の瞬間、後悔したかの様な苦い表情になった。

「父さんは去年亡くなりました」

「すまない、君の父君だとは思わなかった……辛い事を思い出させたかな」

「気にしないで下さい、知らなかった事ですから」

その場が重苦しい沈黙に包まれ、お互いに気まずさから何を言えば良いのか分からなくなる。

しばらく屋根から雪が落ちる音や、暖炉の薪が爆ぜる音だけが聞こえてくる空間であったが、軽い足音と共に少年の足に暖かい何かに触れてくる。少年がその方向に目をやると黒炎の紅の瞳がじつと

見詰め返していた。心配そうな様子の黒炎に頷くと、少年は一度目を閉じて深呼吸すると気持ちを入れ替えて学院長へ視線を向ける。

「大丈夫です、父さんは今でも僕達家族の心の中に居ますから」  
硬いが笑顔になった少年は力強く拳を握って学院長へと頷いた。

「それに、いつまでも弱いままだと父さんに笑われちゃいます」  
その力強い様子を見た学院長も笑顔になって少年の頭を撫でる。その瞳は優しそうな光に満ちていた。

「君は強いな、私の目的は達成出来なかったが、新たな光を得た気分だ」

「????」

不思議そうな顔の少年に笑顔を見せながら嬉しそうに頷く学院長は、大怪我してまで訪れた村で目的が達せられないにも関わらず、実に満足そうな様子に見えた。

「さて、そろそろ横になりたくなってきたよ」

お互いの事を少し話題にしながら世間話を楽しんでいた少年と、それを聞いていた一匹は、その学院長の言葉で結構長く話していた事に気が付く。

「そうですね、僕も眠くなってきました」

「君のベッドを占領して申し訳ないが、さすがに今日のところは使わせてもらおうよ」

「はい、僕は黒炎が居れば暖かいから大丈夫ですよ。学院長は傷が良くなるまでベッドを使っして下さい」

「ありがとう、お言葉に甘えてそうさせてもらおうよ、ではおやすみ」  
「おやすみなさい」

学院長が横になるのを助け、布団を身体にかけてから暖炉の薪の様子を確かめる。しばらくはこれで大丈夫だと確認した少年は、黒炎と一緒に毛布に包まりながら暖炉の側で横になる。次の瞬間には室内の全員が眠りに落ち、その場には気持ち良さそうに眠る呼吸の音が聞こえていた。



数日が経ち、学院長の傷も動ける様になると同時に急激に傷が癒えていった。さすがは戦闘職を育てる学院の学院長だと、少年は驚きながらも納得していた。

村の守衛からの簡単な尋問も無事に終わり、晴れて自由の身になった学院長はその夜、少年の家で家族全員と共に食事を摂りながら改めて礼を言う。

「ありがとう、本当に世話になったね」

「いえいえ、遠くから主人に会いに来てくれた方をもてなすのは当然ですよ」

「いや、命を救われて、手当てもしてもらい、本当に助かりました」「目的が達せられなくなった人をそのまま帰したら、主人に怒られちゃいますから」

「ははは、母君には感謝してます、それ以上に息子さんにはね」

「この子がお役に立てて嬉しいです」「自慢して良い、立派な息子さんですよ」

笑顔で会話を交わす学院長と母親の姿に、いつしか学院長と話をするのが楽しくなっていた少年は寂しそうにスープをすすっていた。学院長の次の言葉が予想出来ていたからである。

「話は変わりますが、傷もほぼ癒えたのでそろそろ王都に帰ろうと思います」

「まあ、ウチはまだまだ滞在されてもよろしいんですよ。」

「この子も学院長さんの話に喜んでいきますし、傷が完治してからの方が良いのでは？」

「十分傷も癒えました。それに私は学院長なので余り長い事学院を留守に出来ないのです」

「そうですね、残念ですが気を付けて帰ってくださいね。」

この辺は田舎で山も近いので雪が結構積もっていますから足元には注意して下さい」

「ありがとう、さあせっかくの料理が冷めてしまつから、食事にしましょう」

終始楽しそうな雰囲気です。食事を終えると、少年の母親は食器を洗う為、台所へ行き、少年は食器をまとめて流しへと運んだ。

少年が戻ってくると、学院長が笑顔で待っていた。

「君には本当に世話になった、ありがとう」

頭を撫でながら礼を言う学院長であったが、少年の顔は曇ったままだった。

「そんな顔をしていたら父君に笑われてしまうんじゃないかな」

「うん、でも学院長さんのお話が楽しくて、別れが寂しいんだ」

「嬉しいよ、そう思ってくれて」

そう言い、学院長は少年の肩に手を置いてから視線を合わせるようにしゃがんだ。

「確かに別れは寂しいものだ、だけど再会の喜びに変えられる。

また会えた時にお互いの成長や、離れていた時の話をしようじゃないか」

「また会える？」

「ああ、お互いがそう信じていればいつかは叶う。

だから、別れの時には笑顔で、『またね』と言おう」

少しの間無言で学院長の顔を見ていた少年は頷いて笑顔を見せる。

「うん、またいつか会えると信じるよ」

「偉いぞ、君の成長を楽しみにしてる」

同じ様に笑顔になった学院長は、少年の頭を撫でながら頷き返した。

台所からは、洗い物の終わった少年の母親が笑顔で少年を見詰め、黒炎は笑顔になった少年に嬉しそうな様子で尻尾を振っていた。

翌日の早朝、村の門の前には学院長と少年と黒炎の姿があった。

少年の母親とは家で別れを交わしていたのでこの場には居ない。いつもより早めに門を開いてくれた守衛は少し離れた所で様子を見ている。

「今日晴れてくれて良かったね」

「そうだな、吹雪は老骨には堪えるからな」

笑いながら言う学院長に、約束通り、少年もまた笑顔であった。

「学院長さんは強いけど気を付けてね、油断してるとまたやられちゃうよ」

「ははは、今度はさっさと逃げる事にするよ、帰り道だからね」

「うん、それがいいよ」

「うむうむ」

笑顔で話す二人の側で欠伸をしていた黒炎に、学院長は唐突に視線を向ける。

「今度会った時は、黒炎君も私と話をしてくれると嬉しいな」

「気付いていたんだ、黒炎が話せる事を」

「伊達に学院長をしていないさ」

説得力のまるで無い返答をする学院長を、黒炎は驚いた顔で眺める。その様子に楽しそうにウインクを返す学院長は、悪戯が成功した少年のように嬉しそうであった。

「そうだ、これを君に渡しておこう」

そう言って少年に渡したのは、白く高級そうな造りの封筒であった。表には『紹介状』と記されており、裏には学院長のサインがある。

それを確認した少年は問う様に学院長の目を見た。

「数年後、もし君が王都に来る意思があり、君の将来に戦闘職への道があれば私の学院に来なさい。」

奨学金、つまり卒業してから返金する制度で君をウチの学院に推薦してあげよう」

突然の話に、少年の口調も改まったもの変わる。

「え、いいんですか・・・ありがとうございます、その時はお世話になりたいです」

「但し、母君が反対したらこの話は無かった事になるからね。」

来る場合はきちんと説得してからにするんだよ、母君を一人で村に残すのだから」

「はい、分かっています。」

僕も母さんを一人にするのは心配ですから、母さんと良く相談し

てから決める事になると思います」

「うむ、いい子だ。それではまた会える時を楽しみにしてるよ」  
学院長は少年と黒炎を笑顔で見てから手を振ると村から街道へと続く道を進み始める。

「僕もまた会えるのを楽しみにしてますね、お気を付けて」  
元気に手を振る少年の傍らでは、別れの挨拶をする様に大きな尻尾を振る黒炎の姿があった。

何度か振り向き、少年と黒炎の姿に笑みを深めながら手を振る学院長の姿は次第に見えなくなっていく。その姿が雪景色に完全に見えなくなるまで手や尻尾を振っていた少年達は、一度も悲しそうな顔になる事も無く、家へと戻っていく。その瞳は目標に向かっていく者の力強さで強い光を放っていた。

## 序章（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

## 旅立ち（前書き）

前回の投稿から1週間で投稿出来ました。週刊誌みたいな感じに次回も同じ位には投稿出来るようにがんばります。

## 旅立ち

抜けるような青い空がどこまでも続いている。北の大地の空は陰しく高い山脈の影響で天候が変わり易く晴天になる事が少ない為、今日の様な青空は貴重で気持ちの良い物であった。

「ふう〜」

自宅の裏、少し離れた場所に建っている石造りの小屋から出てきた人影は、10代半ば位、少年から青年に向かう年頃の人間である。激しく運動していたかの様に汗びっしょりの身体を手拭いで拭いながら、深呼吸をゆつくりと行う。作業着を脱いだ裸の上半身は引き締まって、全体的に猫科の動物の様な印象がある。ボサボサの黒髪と優しそうな黒い瞳、同年代の平均的な身長よりは少し低い身長は、どこか草食動物の様な印象を受ける。

凝り固まった身体を解す為に、腕や首を回したり、ストレッチを行う。十分な時間を使って身体を解したその顔は、どことなくやるべき事をやり切った満足感の様な物があった。

サクサクサク

軽い足取りで枯れた草の上を歩く足音が家の方向から聞こえてくる。聞き慣れた音に、笑みを浮かべながら聞こえて来た方向へと視線を向ける。こちらへと向かってくる姿は予想通りでありながら、思わず微笑を浮かべてしまうような光景であった。

「ダスク、キミっていつも着替えを忘れるけど、間抜けなのかい？」  
「黒炎、君もなかなか楽しい状態だけど」

家からこちらへと向かって来ていたのは、艶やかな黒い毛皮の獣、黒炎である。6年前よりも大きくなり、少年改め、ダスク・ウオールの腰の辺りまで届いている。その頭には手拭いが、背中にはダスクの着替えが載っている。微笑ましいというか、楽しい光景になっていた。

「キミの母ちゃんが持って行けて、乗っけたんだよ」

不満そうな様子で、ルビーの様に紅く輝く瞳を細めてダスクを睨んでいる。

「あはは、持ってきてくれてありがとう」

頭の手拭いをどかしてゆっくりと撫でながら笑顔で礼を言う。汗の引いた身体が冷えないうちに、背中の着替えも受け取って着替える。黒炎は撫でる手に気持ち良さそうな顔をした後、全身を振るって毛の乱れた場所を直す。

「それで、完成したのかい？」

「うん、父さんの腕には及ばないけど、僕なりに納得できる物が出来たよ」

黒炎の問いに、満足そうな笑顔で答えるダスクの顔から、それが嘘では無いと納得できる。嬉しそうに尻尾を一振りした黒炎は、ダスクを石造りの小屋、鍛冶小屋へと向かうように押す。

「早く見せてよ、ボクも他人事じゃないし」

「いいよ、家に戻るから全部装備して見せてあげる」

頷いて扉を開け、黒炎をその場に残して再び扉を閉める。ダスクが、黒炎にはフル装備を見せたいと考えたからだろう。黒炎の方も楽しみらしく、尻尾をブンブンと音が出る位の勢いで左右に振っている。

ガチャ

扉が開く音に、黒炎は、弾かれたように視線を向ける。扉の形に暗い室内が窺え、一瞬何も無い様に見えたが、くすんだ黒色の塊が動き出した事でダスクが出て来た事を確認できた。6年前から使っている鎧は、定期的に調整されて今の体型に合わせてある。とはいえ、相変わらずのずんぐりとした印象は拭えない。

「相変わらず丸いな、それでも少しはましになったと思うけど」

「まあね、父さんの形見だから基本的な所はあまり手を加えてないから。」

でも、遺言通り、自分の手で調整しながら良くなる様に努力はしたよ」

最初の分厚い鉄板を鎧の形にしただけのようなデザインは、父親が



ダスクへの課題として遣した物である。己を鍛えるのは、身体能力だけでは無く、鍛冶の技も含まれていたからだ。

ただ分厚い円筒等で構成されていた鎧は、所々、湾曲した部分を加え、衝撃を受け流す効果が加わっている。それに加えて、ワンピースの装飾も目立たない様にされている為、見る者が見れば価値のある造形物であると評価されるかもしれない。

黒炎は、ゆつくりとダスクの周りを回りながら採点する様に眺める。その尻尾は機嫌の良さそうな動きでゆつくりと振られていた。

「なかなかいいね、ボクも手伝った甲斐があつたよ」

「ありがとう、お眼鏡に適って嬉しいよ」

嬉しそうな声が鎧の兜の辺りから聞こえてくる。全身鎧なのでほとんど外に出ている部分がない為、声以外はダスクの様子を確認する術は無かつた。

「それで、それがキミの造つたモノだね」

そう言う黒炎の瞳は、ダスクの両手に持たれている物に惹き付けられている。その巨大な物体は、ダスクの様な小柄な体格の人間にはとてもじゃないが持てないと、誰でも思う様な装備に見える。両利きなので左右は関係ないが、右手に持たれている物は身長より長く幅や厚みも通常の物とはかけ離れている。一方、左手に持たれている物はずんぐりとした鎧全てを覆い隠す程の大きさがあり、厚みは鎧に使われているものよりも厚いので、その重さは簡単に計算する事も出来ない位であると予想された。

「でつかいね・・・大丈夫なのかい、それ」

ずっと一緒に居た黒炎でも驚く位、それらは大きな存在感と重量感をもってその場に存在していた。

「大丈夫、両方合わせても父さんの形見の鍛冶用ハンマーより軽いから」

苦笑いする様な声色で答えるダスクは、頬を掻きたかつたのだろう、右手を空けて兜の横をゴツイ籠手で触れている。置かれた長い方は、地面に少々沈み込んでいた。

「そっか、それじゃあ戻ろうよ。お腹空いちやっただよボク」

「そうだね、僕も仕上げをするのに昼飯も抜いちやっただから、正直しんどい」

頷き合つて家へと向かう。黒炎は軽い足取りで先を歩き、ダスクは重さを感じない動きでそれに続く。驚いた事に重量感のある足音は聞こえず、普通の人歩いている様な足音であった。

ガチャ

家の裏口の扉を開けると、待っていたかのようにダスクの母親が仁王立ちしていた。

「いつまでも戻って来ないから、どうしたかと思つたわよ」

バツが悪そうな様子になったダスク達は、それぞれ頭を下げたり、耳と尻尾を力無く垂らしたりして謝罪の気持ちを伝える。

「ごめん、ちよつと話し込んだんじやって」

「母ちゃん、ごめんよ」

「もう、しょうがないわね、ダスクはさっさと鎧を脱いできなさい、黒炎はこつちで手伝つて」

「うん、行ってくる」

「はい」

それぞれの答えを返して、それぞれの方向へと向かう。ダスクは自室へ、母親と黒炎はいつも食事を摂っているリビングへと。

部屋着に着替えたダスクがリビングへ入ると、母親は台所で料理を温めなおしており、黒炎は器用にテーブルを布巾で拭いている。

入ってきたダスクに気が付いた黒炎は、不満そうな声で愚痴を言う。  
「母ちゃんったら、獣使いが荒いよ。出来るからってボクにテーブル拭きをさせるなんて」

「あはは、ご苦労様。それにしても、黒炎も大きくなつたな」

笑いながら黒炎の頭を撫でたダスクは、テーブル拭きを交代する。面倒臭がついていても、黒炎は仕事をほぼ済ませていた。テーブルの上は端を除いて拭き終わっている。

「いいのよ、黒炎だつてウチの子なんだから、手伝うのは当たり前」

台所からスープの入った器を持ってきた母親は、テーブルに皿を並べながら言う。ダスクはパンを運ぶのを手伝ったりしながら、黒炎用の水等を用意した。

「さあ座って、それでは、いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

全員揃って『いただきます』を言う。これが普段からのこの家の基本ルールである。ゆっくりと食事をする母親を尻目に、ダスクと黒炎は勢い良く食事を掻き込んでいく。母親は呆れたようにその様子を眺めており、口元には笑みが浮かんでいた。

ある程度食事が進んだところで水で食べ物を流し込み、ダスクは真剣な表情になる。その様子を黒炎はチラリと見るが、何事も無かったかの様に食事に戻る。母親は気付いているのかどうか、相変わらず笑顔で食事を続けていた。

「母さん、話があるんだけど、いいかい？」

「いいけど、なんだい？」

ん？という表情で自分を見る母親を見ながら、ゴクリと唾を飲み込む。食事を続ける黒炎は、ピンと立った三角の耳がピクピクと動いて聞き耳を立てている。

「お願いがあるんだ」

普段通りの顔で話の続きを促す様に母親はダスクの目を見る。ダスクはしっかりと目を見返しながら、あの時からずっと考えていた事を伝える。

「6年前の学院長さんの事、覚えてる？」

「ああ、あの時の学院長さんだろ？大怪我してて大変だったね」

「うん、黒炎が見付けた時の血塗れの様子はすごかった」

自分の名前が出てきた黒炎は、耳をピクリと反応させたが、気にしないように水を飲む。

「それで、学院長さんが帰り際に誘ってくれたんだ。」

王都で自分が責任者をしている学院に来ないかって、紹介状も書

いてくれたんだよ」

「まあ、そんな事があつたのね・・・それでお前はどつするんだい？」

再びゴクリと唾を飲んだダスクは、逡巡する様な表情で口を開いたり閉じたりする。それを見た母親は一転して厳しい表情に変えてダスクを見る。

「その程度の気持ちなのかい？何をやるにしてもそんなんじややるだけ無駄だよ」

その言葉に、知らずに俯いていた顔が跳ね上がり、その勢いのまま椅子を蹴倒して立ち上がる。奮然とした表情になったダスクは、母親にくつてかかる様に声を荒げる。

「そんな事は無いよっ！僕は6年間この為に色々な事をやってきたんだっ！」

父さんの言った通りに鍛えてきたし、仕事もやってお金も結構貯めた。

遺言だった形見の鎧を自分の物と言えるモノにもしたし、

それに、それにっ！」

「じゃあ、いいんじゃない？」

「ええつと、後は、後は・・・えっ？」

いいの？僕が・・・僕と黒炎が王都に行っちゃっても」

「ぶっ、あははは、なんて顔してるんだい」

ポカンとした顔で母親の顔を見返すダスクの表情が面白かったのだろう、盛大に笑いながら腹を押さえる母親の様子に呆然とした様子で、ダスクは固まっている。

「ぶ。ぶ。ぶっ」

傍らから聞こえて来た黒炎の笑い声に、ダスクはハツとした様子で我に返つたようである。怒つたような、困つたような、複雑な気分で母親の方へと視線を戻す。

「母さん・・・ふざけてないで真剣に考えてよ」

「何言ってるんだい、全然ふざけてないよ。」

何かを成そうとするんだっ たら気持ちで負けてたらだめじゃないか」

「それはそうだけど・・・」  
不満そうな顔で見てる我が子の様子に、母親は相手を慈しむ様な表情に変える。

「知っていたよ、この6年間、何かの目標に向かって進もうとしているのを。」

あたしは、あなたの母親だよ？それくらい分からなくてどうするんだい」

「っ、だって僕達が居なくなったら母さん一人になっちゃうんだよ？」

「そんなの大丈夫だよ、あたしを誰だと思っているんだい。」

息子の夢に反対する様な肝っ玉の小さい女だと思われたくはないね」

「母さん・・・」

ダスクは己の視界が歪んでいるのを自覚する。その原因が頬を伝って流れ落ちるのを感じながら、胸中を熱くする感情に、しばらく動く事が出来なかった。

少し無言の時間が流れた後、ふと脚あしに暖かいものが触れるのを感じる。ダスクが視線を向けると、心配そうにこちらの顔を見上げてくる黒炎の瞳があった。フツと、知らずに止めていた息を吐き、黒炎の頭を撫でてから、気が付いたように頬と目を拭う。拭い終わった手の下からは、少し赤くなった目と感謝の笑顔が出てきた。

「ありがとう、僕には母さんと黒炎、それに心の中に父さんが居るとても心強い味方がずっと側に居ただね」

「ほらほら、これから目標に向かって進んでいく男が、小さな子供みたいに泣いているんじゃないよ」

すこし赤くなつた目でこちらを見る母親に頷いたダスクの顔は、短い間に少しだけ成長して、大人の顔に近付いたかと錯覚させた。

「母さん、約束するよ。絶対に僕は強くなって、誰かを守れる人間

になるって」

「ああ期待しているよ、夢をかなえて戻ってくるのを、父さんと一緒にずっと」

「うん、待ってて」

暖かい空気がその場に満ちている、そう思えるような和やかな時間を過ごす。親子の絆を実感できる貴重な機会を得られたダスクは、益々力が湧いてくる心地であった。

「ちよつと、ボクの事も忘れないでよっ」

完全にのけ者になっていた黒炎が拗ねたふうにダスクの脚を突付いてくる。それを見たダスクと母親は楽しそうに笑い声を上げた。

そつぽを向いてしまった黒炎に、ダスクは真剣な顔に戻ってから黒炎の傍らにしゃがむと、その首をギョツと抱き締める。ビックリした様子で固まる黒炎に、ダスクは艶やかな毛皮を撫でながら言葉を贈る。

「忘れるはずがないよ、僕達はずっと一緒だから」

瞳を閉じて気持ち良さそうな顔をする黒炎の尻尾は、リラックスした様にゆったりと振られている。

「（そつだよ、一緒に居てくれなきゃ）・・・約束だから一緒に居てあげるよ」

前半は小さくてほとんど聞こえてなかったが、期待通りの言葉にダスクは嬉しくなって、もう一度ギョツと抱き締め直した。

「ありがとう、頼りにしてるよ、相棒」

その様子を嬉しそうな顔でジツと見ていた母親も黒炎に向けて頷く。

「黒炎、その子の事お願いね」

「ふんっ、しょうがないから任されてあげるよ」

照れ隠しの様な言葉で母親と話す黒炎の尻尾は、その言葉を裏切つて、頼られた事を喜び嬉しそうに振られていた。

ダスクは、仕切り直すように深呼吸を1回してから、改めて席に座り直す。今度は、少し冷めてしまった食事を食べ終えてから続ける事にした。せっかくの料理がもったいないと思ったようである。

黒炎は既に食べ終わった食器の前から暖炉の前へ移動して丸くなつた。

「それで、いつ出発するつもりなんだい？」

何度かお替りしたスープがダスクの皿の中から無くなるタイミングで、先に食べ終わっていた母親からの問いが来る。スプーンを置き、カップの水を飲み干したダスクは、口元を拭ってから母親へと顔を向ける。

「うん、鎧と装備が出来たから、ちょっと急だとは思ってたけど明日出発しようかなと思ってる」

その言葉に、一瞬表情を変えた母親だったが、誰にも気が付かれない程度であった。色々と思う事があるのだろう、余りにも突然の事なので動揺が表に出てしまったのかもしれない。

「ずいぶん急だね、準備は出来ているのかい？」

「うん、少しずつ必要そうな物はまとめていったから」

「そう、忘れ物があったら困るだろうから、ちゃんと確認しておくんだよ」

「わかった、ちゃんとやつとくよ」

嬉しそうに答える息子の様子に、複雑そうな顔の母親は、親の心子知らず、という言葉が頭に浮かんだ。

「そつだ、渡しておく物があつたんだ」

「なにかしら」

「これなんだけど、母さんに使って欲しくて」

そう言いながら腰の後ろから取り外したのは、重そうに膨らんだ皮袋であった。ダスクは身を乗り出して母親の目の前に置く。金属のこすれる音と共に、重そうな音がテーブルに響いた。

「これは？」

「中身を見てみてよ、母さんの為に用意したんだ」

首をひねりながら皮袋の口を縛っている皮ひもを解く。皮袋を開いた母親の顔には、ランプの灯りが反射する中身からの照り返しの光が当たっている。皮袋の中身は、銀貨が詰まっており、所々、価値

の高い金貨が覗いていた。

「これ・・・こんな大金どうしたんだい？まさか・・・」

「待って、待って、別に悪い事をして稼いだんじゃ無いから！」

顔の前で両手を振るダスクの様子に、嘘は言っていないと納得した母親は不思議そうな顔になる。

「じゃあどうやって稼いだんだい？」

「うん、実は魔狼の毛皮を売ったりしたんだ、都会から来た行商人に結構高く売れるんだよ。」

まあ、高価な金貨は珍しく魔皇熊まおうくまを狩れたから、その毛皮のおかげなんだけどね」

「魔皇熊っ！あんた、あんな危険なヤツを狩ったのかい・・・本当に無茶するねえ」

今迄見た中で一番驚いた顔になった母親は、心底呆れたようにダスクの顔を見る。魔皇熊はこの辺りでも珍しい獣で、普通の熊の倍以上になる。性質は獰猛で、出会ったら必ず死ぬと言われており、狩りを生業にしている猟師達も避ける獲物である。しかし、その毛皮は美しく、大部分を占める白銀の毛の中で四肢だけが黄金の毛に覆われている見事な物である。好事家には人気のある物なので大金で取引されている。

「それはいいとして、こんなに受け取れないよ。お前達もこれから必要になるだろうし」

「大丈夫だよ、王都までの旅費とか食費は抜いてあるし。」

実際に学院に通う事になったとしても、学院長さんが奨学金を出してくれるらしいからね」

「そうだとっても、お前だって都会の生活なんてした事もないだろうっ？」

どれくらい必要になるかなんて分からないじゃないか」

「平気だって、必要になってもならなくても向こうで働くと思うから」

「いいからもっと持っていきなさい」



「いって、母さんが使つてよ」

平行線になつた会話に、双方とも引く事をしない、ある意味似た様な親子である。譲り合う両者に、寝ていた黒炎はうるさそうな様子で首を上げると、テーブルの方へと視線を向ける。

「もう、何でそんな無駄な言い合いをしてるんだよ」

「無駄じゃないわよ、お前達がこれから村の外で生活していくんだから必要だろ」

「違つよ、母さんだつて生活があるんだから必要になるだろっ」

「むう、だったら分ければいいじゃん！」

銀貨は半分にするとして、金貨の方はダスクが命懸けで母ちゃんの為に熊倒したんだから、それは受け取らないと駄目でしょ」

「「うう」」

折衷案でありながら、説得力のある解決方法を黒炎に言われた二人は、反論も出来ずにただただ黙るのみであつた。知性は人間並みに高いとはいえ、動物に言い負かされている人間の様子は、この場面を見ている人が居るならば、とても滑稽であると思つただらう。

「はあ、そうしましょうかね、まったく頑固なんだから」

「母さん、頑固なのはお互いさまだろ」

相変わらずの二人の様子に、似たもの同士だな、と思ひながら首を振り振り再び丸くなる黒炎であつた。

その後は、意見がぶつかる事も無く、順調に会話は進む。明日の天気のことや、昔の事、これからの事について母親と話す。今迄、こういう事を親と話す事が無かつたダスクは、新鮮であり、意外と楽しいものだつたんだなと実感すると共に、しばらく離れ離れになる事がきつかけではあつたが、こういう時間が持てて良かったと思つた。

「そろそろお開きにようかね」

「そうだね、明日も早いし」

頷いて立ち上がり、食器をまとめて流しへと運ぶ。洗い物を始めた母親を手伝おうとしたダスクではあつたが、母親に止められ、あつ

ちへ行けと手を振られる。

「お前達はさっさと部屋に行きなさい。準備を終わらせて明日に備えるんだよ」

「うん、ありがとう、母さん」

ダスクはそう返事をして洗い物をする母親の背中を見る。その小柄な背中に深々と頭を下げると、暖炉の側で丸まっていた黒炎を連れて部屋へと向かう。

「うにゃ」

寝惚けて変な声を出した黒炎の声を最後に、その場には洗い物の音だけが聞こえていたが、少しして違う音も聞こえてきた。

「うつ、うつ・・・」

押し殺したような声が、途切れ途切れに水の音の合間に漏れるが、それを聞いている者は発している本人のみであった。

ガチャ

部屋に黒炎を入れてから扉を閉めたところで、ダスクは溜息を吐いてからベッドへと移動すると、身体を投げ出すようにしてうつ伏せでベッドに横たわる。

「ふう、説得というよりも母さんが察してくれただけだし、何やってるんだろうな」

自嘲的な言葉が口から飛び出す。もつとうまく出来たはずだという不満が言葉の端々から滲んでいる。その様子に、暖炉の種火に口を使って器用に薪を積んでいた黒炎は、呆れたような声でダスクに言う。

「いいじゃん、結果的にはうまくいったんだから」

「ホントにまだまだ駄目だな、僕って奴は」

「そんな事より、明日の準備とか、持ち物の確認とかやらなくていいのかい？」

「いいんだよ、時間をかけて準備してきたんだから大丈夫。」

明日の朝に最終確認だけすれば問題ない・・・それに、今日はもうやる気が起きないし」

「相変わらずだなあ、キミは」

しばらくすると、パチパチと音を立てながら燃える薪が部屋の中を暖めてくれる。黒煙は気持ち良さそうに暖炉の前で丸くなり、ダスクは布団に潜って顔だけ出して暖炉の方を眺めていた。

「ねえ、黒炎、僕達はうまくやれるかな？」

「分からないよ、こればかりは実際にやってみないと」

「そうなんだけど、僕達はノースアタロスから離れた事が無い田舎者だろ。」

今までの慣れ親しんだ場所から離れて、王都なんていう都会で生きていけるのかなって

「大げさだな、なんとかなるって、ボクも一緒にいるんだし。」

「どんな事があってもボク達ならどうにでもなるって」

「そっか、そうだね、僕達なら大丈夫。今迄も、色々な事を一緒に乗り越えてきたもんな」

「でしょ、とにかくボクについてこいっ！」

「あはは、頼りにしてるよ、ホント」

笑い合いながら双方共に不安を心から追い出そうとする。これはダスクと黒炎が会ってから続けられてきた習慣の様なものである。こうやって色々な問題と立ち向かってきた。異種族でも心が通い合えば良い相乗効果を生み出す一例であった。

「ホッとしたら眠くなってきたよ、明日の為にさっさと寝ちゃおう」

「そうだね、ボクも眠くなってきたし」

「ありがとう、おやすみ、黒炎」

「おやすみ」

不安だったのはダスクと黒炎の両方だった様で、暖かくなった部屋と安心感からか吸い込まれるように睡魔に身を委ゆたねる。あっという間に部屋の中に聞こえる音は、薪の弾ける音とダスク達の安らかな寝息の音だけになっていた。

チュンチュンチュン

早朝の薄明かりがカーテンから漏れる窓の外からは、目を覚ました小鳥達の鳴く声が聞こえてくる。暖炉の火も種火の大きさになり、冷えた室内ではベッドの上のふくらみだけがモゾモゾと動いていた。「……むにゃ……」

言葉にならない寝言をつぶやいたダスクは、寒そうに身震いすると暖かさを求めるように側にあるモノを引き寄せる。寝ている事もあって、少しでも近づける為に手加減抜きでギュッと抱き締めた。

「ふにゃ……っ、イダダダダッ！」

ちよっ、ちよっ、ヤバイって、出ちゃう、中身が出ちゃうよっ  
！」

ミシミシと身体中が悲鳴を上げている音を聞きながら、黒炎らしき影はダスクの腕から逃れようと暴れる。悲鳴と一緒に、前足でダスクの顔をバシバシ叩いているうちに限界が近付いてきた。「ボク、もうダメなのかな」、そう思った瞬間に腕が緩んで開放される。荒い呼吸を繰り返す黒炎の姿に、目を覚ましたダスクは不思議そうな顔を向ける。

「ふわぁ、おはよう、黒炎。また僕の布団に入ってきたのかい。」

それにしても、いったいどうしたんだ？グツタリしてそんなに呼吸を荒げちゃって」

「キミがっ……はぁ、もういいよ。潜り込んでいたボクが悪いんだよ、きつと」

「???」

トンッ

不思議がっているダスクを残して、黒炎はベッドから軽やかに床へと降りる。暴れて乱れた毛並みを直す為に全身を振るうと、サラサラの毛はあっさり元の艶やかな状態へと戻る。固まった身体を解すように全身を弓のようにして伸びをする様子は、当人ではなくても気持ち良さそうに見えた。

「遅くなっただけど、おはよう。早く朝ごはん食べて準備しちゃうよ」

ベッドから降りたダスクは、両手を上に挙げながら伸びをしていた手を降ろして頷く。

「そうだね、着替えるからちょっと待ってて」

そう言つて、手早く寝巻きから普段着に着替えると、扉を開け、黒炎を促して部屋を出る。

リビングに向かいながら、いつも通りのスープの良い匂いを感じて少し寂しい気分になる。明日からは慣れ親しんだこの匂いが無い場所に居るのだろう。感傷に浸りそうになる気分から逃れるように、軽く首を振ってリビングに入る。

「おはよう、母さん」

「おはよ〜」

「おはよう、顔洗つてうがいでもしてきな・・・黒炎、あんたもだよ」

「えっ、ボクも？・・・はあ、わかったよ」

外の水場へと方向転換したダスクとは逆に、暖炉前の定位置に行こうとしていた黒炎は渋々とダスクの後を追いかけて行く。家を出て井戸から水を汲むと、半分は地面の桶に注ぎ、半分はそのまま井戸の石組みの上に置く。触れる水は予想通り冷たく、洗顔やうがいをするにサッパリとして眠気はすっかり無くなった。

「母ちゃん、いつも通りだったね」

器用にうがいつばい事をした後に、黒炎は桶に顔を突っ込んでから水を振り飛ばす。

「だね、やつぱり母さんは強いや」

手拭いで水気を拭い、深呼吸をして朝の空気を胸一杯に入れる。ダスクは、吐く息と一緒にモヤモヤとした気分も一緒に出ていってくれればいいのに、と思っていた。

外から戻り、リビングに入ると朝食の準備は既に済んでいた。何事も無く、いつも通りの朝食風景がある。昨晚の出来事はまるで夢だったかのようである。

「今日はどうするんだい？朝食の後すぐに出発しておくかい」

「そうだね、食べ終わったら、持ち物を確認して出発するよ。  
あつ、村を出る前に父さんに挨拶してからにする。報告するのを  
忘れてた」

「それがいいね、ちゃんと『いつてきます』の挨拶をしていきな」  
食事を終えて、先に済んでいた黒炎と共に立ち上がる。昨晚に続き、  
片付けの手伝いは断られてしまったダスクは、笑顔を母親に向ける。  
黒炎も思うところがあつたらしく、ジツと見詰めていた。

「ごちそうさま、美味しかった」

「ごちそうさま」

これからしばらくは食べれないお袋の味は、気持ちの違いなのか、  
いつもより美味しかったと感じた。

部屋に戻り、荷物を検める。日にちをかけてきただけあって、旅  
をするのには十分な荷物が出来上がっている。黒炎は手持ち無沙汰  
らしく、暖炉の前で横になってダスクの方を見ていた。

「黒炎、これ作ってみたんだけど、どうかな？」

「ん？なに作ったんだい？」

ダスクが手に持っている物を良く見ようと近付いていくと、それは  
金属と革等で出来た・・・何かであった。不思議そうな顔をしてい  
る黒炎に痺れを切らしたダスクは、手に持っている物を見やすいよ  
うに広げた。

「分からないかな、黒炎用の背囊とか部分鎧とかだよ」

「えっ、それボクの方？重いのは苦手なんだけどな」

「これから何があるか分からないから必要かと思つてね、

とりあえず背囊に予備の保存食くらいは持つてもらおうかと思っ  
たんだ。

鎧に関しては僕が持つていくから安心してよ」

「それくらいならいつか、せっかく背囊も黒く染めた革や布を使っ  
てくれてるんだし」

「毛の色に合わせてみたんだ、我ながら良い出来だと思うよ」  
自信作なのだろう、ダスクはニコニコしながら製作中のあれこれに

ついて語っている。黒炎は、また始まった、と呆れながら聞いていた。

持ち物の確認が終わったところで、黒炎に背嚢を背負わせ、鎧と荷物を身に付ける。ダスクと黒炎は無言で部屋の中の物を順に眺める。出発点の光景を目に焼き付けるかのようにゆっくりと。

「さあ、僕達の長い旅を始めよう。笑顔でこの場所に戻って来れる様に頑張ろうな」

「そうだね、大変そうだけどつきあってあげるよ」

頷き合って歩き出し、扉を開ける前に暖炉の火も完全に消しておく。扉を開け、黒炎を促してリビングへ行くと笑顔の母親が待っていた。その手には大きめの包みが持たれている。

「はい、これ、お弁当を持っていきな。飲み物も入ってるからちゃんと食べるんだよ」

「ありがとう、母さん」

兜を外して顔を出し、同じく笑顔で受け取ったダスクは、自分の背嚢に大切そうに入れる。

「気を付けて行っておいで。」

お前達はあたしの大事な息子達だからね、帰ってくる時は一緒に帰ってくるんだよ」

目を少し赤くした母親は、そう言ってダスクは鎧の上から（少々抱き締めにくそうにしていた）、黒炎はしゃがんで視線を合わせて、抱き締める。ダスクは泣き笑いの顔で鎧に涙の雫を落とし、黒炎も珍しく紅く輝く瞳に涙を溜め、別れを噛み締めていた。

別れの後には新しい出発が待っている。涙を拭い、表情を笑顔に変え、この出発を明るいものとする為に、元気良く玄関へと移動する。扉を開けると今日も空は青く、気持ちの良い一日になりそうだった。

「いつてらっしゃい」

優しい声で送り出してくれる母親に応える様に、元気良く始まりの言葉を告げる。

「いつてきます!」「  
手を振り合つて離れていく。最後まで笑顔で居てくれた母親に、まだまだ勝てないなと思うダスク達であった。

ガチャ

ダスク達の姿が見えなくなった後、家に入って扉を閉めた母親は抑えていたものが溢れるのを感じる。

「アナタ、あの子達を守つてやって下さい・・・」  
誰も見ていない場所で、亡き夫に祈る姿を見る者は誰も居なかった。

無言で村の外れまで歩いていく。村の北東の柵そばの側には、この村で亡くなった人達の墓石が立ち並んでいる。墓石の間を抜けて、一番柵に近い所にウォール家の墓がある。右の墓石、盾の意匠がされた方には祖父と祖母が、左の墓石、交差した鎚つちの意匠がされた方には父が葬られている。墓石の周りの雑草を手早く取り除いて、祖父と祖母にも簡単に出発の挨拶をすると、ダスクはジッと父の墓を見詰めた。

「父さん、これが僕の技だよ。まだまだ未熟だと言われそうだけど、これが今の僕なんだ」

両手の装備と鎧を見せるように両手両足を広げる。陽光に照らされて、尚そのままの、くすんだ黒色に光っている。

「しばらく村を離れる事になったから、母さんの事を見守っていて。僕の方は大丈夫だから、黒炎が付いて来てくれるし」

「うん、ボクが一緒だから心配ないよ。母ちゃんの事は父ちゃんの役目だからね」

黒炎も思うところがあつたのだろう、墓石にポンッとタッチすると尻尾で挨拶するようにゆっくりと振る。それを見て、ダスクも黙禱を捧げた。

「それじゃあ、いつてきます、父さん」

「いつてきます」



一礼をして歩き出す。墓地から中央を貫く東西の道に戻り、西の端にある門へと向かう。早朝なので、まだ人の姿は見られない。出発の挨拶は前もって行っているなので心配はなかったが、知人の顔を見ずに別れるのは少々寂しいものなんだとダスクは思った。

「おはよう、早いな、とうとう行くのか？」

「おはようございます、はい、いつてきます」

門の側に居た守衛に声をかけられる。一人だけでも別れに立ち会ってくれる事が、なんとなく気持ちを楽にしてくれる。一つ頷いた守衛は、すぐに門を開けてダスク達を通してくれた。

「気を付けてな」

「ありがとうございます」

「いつてきます」

ダスクは頭を下げて手を振り、黒炎は尻尾を大きく振る。少し歩いて、守衛が小さくなってきたところで、黒炎の三角の耳がピクリと動く。何かたくさんの音が後ろから聞こえてきた気がした。

「何か聞こえるよ」

「ん？どこから？」

「後ろ、村の方向からだね」

「後ろ？何だろう？」

そう言つて、後ろを振り返つたダスク達の目に思つてもみなかった光景が飛び込んでくる。そこには、ほとんどの村人が集まって、こちらに向かつて手を振っていた。

「がんばれよ」

「身体に気を付けるんだよ」

「お前の母さんの事は心配するな、みんな村の仲間だから任せておけ」

「途中で逃げ帰ってきたらしょうちしないぞ」

「ダスクくん、黒炎ちゃん、がんばって」

村人達からの温かいエールが辺り一面に響き渡る。今迄に無い人々の大きな声に、鳥達は飛び立ち、獣達は森の奥から何事かと様子を窺っている。晴れ渡った青空に応援の声、旅立ちの門出には相応しい光景が目の前にあった。

「みんな・・・」

「いいやつらだな」

「そうだな、良い人達だ」

あまり大きくない村だから村人全員と面識がある。だからといって全員と同じ様に親しい訳では無かった。それなのに、ほぼ全員の村人が自分達の見送りに来てくれた事が自然と胸を熱くさせる。

「いつてきまゝす！」

顔を見合わせて頷き合わせたダスク達は、タイミングを合わせて大声で応える。ダスクは目立つ両手の装備を振り、黒炎は大きな尻尾を激しく振る。少しずつ進みながら何度も振り返り、だんだん小さくなっていく村の前、見えなくなるまで村人達は見送ってくれた。

「なんか力をもらったって気がする」

「やる気の足しにはなったんじゃないかな」

「うん、改めてここで誓うよ、絶対に夢をかなえて村に帰るって」

「いいね、ボクも一緒だから、ますますかないそうだね」

温かい気持ちになりながら笑顔で先へと進む。いつの間にか別れの寂しさを忘れていている事にも気が付かず、足取りも軽くなっていた。

ここから先はほとんど行った事の無い場所になっていく。街道に入れば人通りも増え、見知らぬ土地、見知らぬ町、見知らぬ人々が待っている。道は未来へと通じているけれど、それはどんな未来へと導いていくのだろう。ダスクと黒炎は無事に王都へと辿り着けるのだろうか。

## 旅立ち（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

## 無知と出会い（前編）（前書き）

前話の投稿と同じペースで投稿できました。気を抜かずに続けられたら良いなと思っています。

## 無知と出会い（前編）

ザアアア

辺り一面、土砂降りの雨で水溜りが出来ている。空は分厚い雲に覆われて薄暗く、大量の雨をまさにバケツをひっくり返した様な感じで落としている。頭上には大きな常緑樹が枝を張り出しており、濃い緑の葉は雨が直接かかるのを防いでくれていたが、葉の隙間から滴<sup>した</sup>ってくる雫だけでも全身が湿ってくる。次第に強くなってくる風に、直接かかる雨が増えてくると急激に体温を奪い始めた。

「風も吹いてるから、さすがに冷えてきた」

「うう、ボクなんて毛が濡れて身体に張り付いてるから、さ、寒い・  
・・」

「ちよつとまずいな。雨風を防ぐ場所を探した方が良いかもしれない」

身を乗り出して雨に霞む景色の奥を見通す様に眺めるのは、くすんだ黒色の全身鎧を装備した人物で、声は鎧の内側なのでくぐもって聞こえるが十代半ば位の少年の声である。

「さ、探すなら一緒に行くよ。戻ってくる二度手間になるし」  
そう言い、身体を振るって濡れた身体から雨水を飛ばしたのは、ピョンと立った三角の耳と狐の様な大きい尻尾を持った艶やかな黒い毛皮の獣で、最も特徴的なのはルビーの様に紅く輝く瞳である。もともと今は、雨に濡れて耳は伏せられ、尻尾や身体は毛がペタツと張り付いてみすばらしく見えている。

前者はダクス・ウォール、後者は黒炎である。ダスクは木の根元に置いてあった荷物を持つと、忘れ物が無いか確認してから黒炎に頷いて合図し、「雨宿りをしていた木の下から走り出す。どうしてこんな事になったんだらう、そう思いながら。」

故郷の村、ノースアタロスを出発したダスクと黒炎は順調に街道

までの道を進んでいた。数日経った今では、だいぶ旅にも慣れてきて、野宿をするのも手際が良くなっている。枯れ木を集めて焚き火を熾し、薪と一緒に見付けたキノコと先程捕まえた兎をさばいた肉で作った串焼きを地面に刺して炙る。その近くにはヤカンがあり、お茶に使う湯を沸かしていた。

「街道つて遠かったんだね。結構歩いているのにまだ合流できない」「あはは、それだけ村が山奥のド田舎にあっただんだね」

「こらっ、そういう事は言っちゃ駄目だよ。僕達の故郷なんだから」「いいじゃん、ボクなりに親しみを込めて言ってるんだし」

「はあ、まあいいか」

苦笑いしながら串焼きの様子を見る。焼き加減も良さそうだと判断して、黒炎の前に皿に乗せて半分置き、自分の分にかぶりついた。

黒炎も熱々を美味しそうに食べている。出発が雪に閉ざされる冬の前、秋であつた為、周囲からは虫の音が聞こえてくる。収穫の秋でもあるから食料も豊富で、その面では野宿にも最適である。問題はこれからどんどん気温が低下してくる事だろう。

「これからどんどん寒くなってくるんだらうね」

焚き火に手を当てながら水筒の水を飲むダスクは、装備を外して楽な格好に着替えている。こちらを見る黒炎の視線に應えて、追加の水を地面の皿へと注いだ。

「さっさと街道に出た方が良さそうだね」

そう言つて皿の水を飲み干した黒炎は、焚き火の前で丸くなる。眠るのではなく、首は持ち上がつてダスクの方を見ていた。

「ボク的には野宿でも美味しい物が食べられるなら全然構わないんだけど、

キミ達ニンゲンは布団で横になって休まないと体力的にしんどくなつてくるんじゃないかな」

「そうかもしれない。僕はまだ大丈夫だけど、この先は分からないからね」

少し考え込んでいたダスクは、表情を真面目なものに変え、黒炎へ

再び視線を向ける。

「明日は少し急いでもいいかな？」

「ん？いいよ、ボクはキミについてただだから」

紅い瞳が笑っている様に感じられ、尻尾は機嫌が良さそうにゆったりと振られている。

「ありがとう、それじゃあもう寝ちゃおう」

「そうだね、おやすみ」

黒炎は、首を引っ込めて黒い毛玉になり、ダスクは食事の後片付けを済ませて毛布にくるまった。

「おやすみ」

小声でささやいて目を閉じるやいなや、眠りへと落ちていった。

早朝、太陽が山の稜線から顔を出すと同時に起床する。簡単な朝食を摂り、荷物をまとめ装備を整えると、さつそく街道を目指して出発する。今日は確実に街道に出たいのでしばらく身体を慣らす為に走った後、本格的に長距離走へと突入した。黒炎の四足の走りは優美で美しい物であったが、くすんだ黒い全身鎧に加え同素材の大きな装備を背中にかついで走る姿は、まるで黒い塊がすごい勢いで転がっている様な印象を与える。たまに森から飛び出してくる動物がそれを見て、恐れをなして逃げていく光景が何度も繰り返された。

ザザザザ

どれ程の体力があれば出来るのか、太陽が真上に昇るまで走り続けたダスク達は、突然木々に囲まれていた道から広々とした道に出る。驚いたらしく、急に止まるうとしたダスクは、鎧等の重さで地面を少しの距離滑ってから止まった。黒炎はぶつからない様に、軽やかに横にステップして、その隣に止まる。

「あぶなっ、さすがのボクでもキミにぶつかったら結構痛いよ」

「ごめん、急に広い場所に出たから驚いちゃって」

「気を付けてよ、もう」

道の真ん中で立ち止まって話をするダスク達は、街道を行き交う旅

人達の目を引くのに充分以上に目立っていた。ほとんどの旅人が指をさしたり、連れと囁き合っている。しばらくの間、言葉をやりあつたダスク達は、自分達が旅人達の注目の的になつている事に気が付く。

「あらら、道の真ん中で話してたら、そりゃ注目の的だよな」

「まいったな、ここで立ち止まつていたら通行の邪魔だな」

「かなり邪魔だったんだろうね、みんなが見てたよ」

「とりあえず早く行こう。確か、街道に出たら右へ進めば良いって言つてたかな」

「そうしよう、せつかく街道に出たんだから町に行こうよ」

「うん、僕も久しぶりにベッドで寝たいからね」

「楽しみだな、最初の町には何があるんだろ」

街道を右へ、つまり西に向かつて歩き出す。ダスクと黒炎、お互いが会話だけに気を取られて周囲へ注意を向けていなかったため、道の端へ寄つて歩いていながらもすれ違う旅人達の視線を依然として集めたままだという事に気が付かなかった。

今日は天候も良く、秋から冬へと変わる時期の冷たい風も吹いていないので、過ごし易い陽気である。見渡す景色は、牧場でのんびり牧草を食む牛が並んでいたりと、黄金色のススキの原こがねいろがあつたりして、とてものかな雰囲気だった。そういつた空気に浸りながら歩いていくうちに、いつの間にか少くない距離を歩いていたらしいふと気付くと、遠めに町らしき影が見えてきた。

「あ、町が見えてきた。ほら、あそこ、見えるかい？」

「やった、記念すべき最初の町だね。ボクお腹空いちやつたから何か食べようよ」

「まだ着いて無いのに気が早いつて。でも、そうしようかな、僕もお腹減つてるからね」

街道に出る為に、朝からずっと走りっぱなしで、その後はずっと歩いてきたからだろう、ダスク達は意識した途端に腹の虫が泣き出すのを聞く。それからは無意識に、先程よりも歩調を速めて歩いてい



たのであるう、町の影はみるみるうちに近付いてきていた。

ガラガラガラガラ

牛に引かれた荷車に続いて町の門へと差し掛かる。数台の荷車が新鮮な牛乳が入った缶や農作物を運んでいる。酪農や農業が主産業の町の様で、ますます食事が楽しみになる。

「え」と、町の名前は・・・アチケツトっていいのか、意外としつかりした町だね」

門の上の壁に書かれている町の名前を眺めながら、黒炎は少し失礼な事を言う。しょうがない、という感じの表情で肩をすくめるダスクも似た様な印象を受けたのだろう、視線を向ける町を囲む塀は自分達の村の柵とは比較にならない位しつかりと造られていた。基礎に石を積み上げ、その上に防火防水作用のある塗料を塗った木材で壁を作っている。

「やっぱり街道沿いだから塀も立派だね」

「ウチの村とは全然違うね。ボクでも乗り越えるのは大変そうだ」

「何言ってるんだよ、乗り越える機会なんてあるわけがない」

「あはは、まあそうだけどね」

門の脇に立っていた守衛に村発行の身分証明書を確認してもらい、何故かこちらを凝視しているもう一人の守衛に見送られる様に門をくぐる。町を東西に貫いている中央通りには今迄見た事も無い数の人が歩いている。道の両脇からは商店の客引きの声が響き、客とのやりとりが一層の活気を辺りに振りまいている。ここから見えるだけで村の人口くらいあるんじゃないかと思えたダスク達は、驚きの余りその場に立ち止まっていた。行き交う人々は、邪魔そうな素振りやダスク達を見るが、まさしく黒い塊という存在感にギョツとした顔で離れていく。

「すごい人の数だ、町にはこんなに人が居るんだね」

「むう、人が多過ぎてボクには周りが見えないよ」

「そっか、それじゃあ肩に乗るかいい？」

「久しぶりにそうしようかな、そのうち誰かにどこかを踏まれそう

だし」

頷いたダスクは乗りやすいように少し腰をかがめる。黒炎は素早く背を駆け上がると、首の後ろに横向きに胴を付け、両肩に足を置く。周りに居た人々は一瞬驚いた様子であったが、動物を肩に載せる様が、どこか微笑ましさを感じさせて笑顔になっていた。

「ねえねえ、あそこの屋台で売ってる串焼きが美味しそうだよ。食べようよっ」

ザワツ

黒炎が話すところを、ダスク達の方を見ていた人々が目にした途端に周囲の空気がざわつく。人々は一様に驚いた顔をしており、近くの人間と何か小声で会話をしていた。

「なんだろう、周りの人がこっちを見ているような・・・まあいつか、ダスク、早く行こっ」

「ん？分かった、落ちない様に気を付けて」

ダスクも黒炎も自分達が注目されるとは思っていないので、周りの反応を改めて意識する事も無く、人々をかき分けて屋台へと向かう。驚いていた人のほとんどは自分の見聞きした事は何かの間違いだっただ、と思い直して首を振りつつ、再び当初の目的に向けて歩き出す。その後も、ダスク達の行く先々で同様の現象現象が起きていたが、本人達は特に気に止めることも無く、初めての町を楽しんでいた。その後ろを追いかけながら、様子を窺っていた人間が居る事にも気が付く事は無かった。

カラーン、カラーン、カラーン

陽も傾き、空は夕焼けで真っ赤に染まっている。帰宅を促す教会の鐘の音が辺りに響き、遠くには巢に戻る鳥達の姿が見え、人々も家路へと足を速めている。壁や建物がある町は、村に居た時よりも暗くなるのが早いらしく、辺りの様子が見えなくなるのも間もなくである。

「屋台の食べ物美味しかったね。町って良い所だな」

「うん、食べ物もだけど、色々な物を売ってて面白かった」

「キミつたら金属の細工物のトコから全然動かなかつたよね」

「う、悪かつたよ。職業柄あいつた物には興味があつたから」

「まあいいけどね。今のボクは美味しい物が食べられて機嫌が良いから」

「あはは、ありがとう」

町を周っている間にやった事を話しながら楽しそうに道を歩く。これだけ暗くなつてくると黒い格好も目立たなくなり、人も少なくなっている。黒炎もダスクの肩の上から降りて地面を歩いている。

たまにすれ違ふ人は黒い塊が突然視界に入ってくる事に驚いていた。「そろそろ宿を決めないとまずいかな」

「そうだね、ボクも部屋の中でゆっくり休みたい」

「今日は結構歩いたからね、僕も同じだよ」

「ところで、宿ってどうやって探すんだい？」

「あ、どうしよう、それは考えてなかつた」

「ええっ、どうするんだよっ！？ボクだつて分からないよ」

困惑したような様子で顔を見合わせる。鎧の顎の有る辺りに手を当てながら考えているダスクを見ながら、落ち着かない風ふうに尻尾を振る黒炎はうろつろつと行ったり来たりしていた。

「お客さん、宿を探しているんで？」

タイミングを見計らつた様に後ろから掛けられた声に、ダスクは振り向き、黒炎はその横へと回つて、新たな登場人物に視線を向ける。少なくとも時間考え込んでいたらしく、真つ暗になつた道を照らす白い月明かりは強くなつていて、道の真ん中に立っていたダスク達をくつきりと見せていた。現れた人影はランプを持っており、その弱い灯りが照らしている姿は、30代後半位の男で、無精ヒゲを残した身なりの悪い格好であった。

「オジサンは誰？ボク達に何か用かい？」

黒炎が話しかけた瞬間に男は少しだけ表情を変えるが、すぐに元に戻して答える。奇妙に歪んだ表情は、辺りの暗さもあって、ダスク達にはハッキリとは見えていなかった。

「あつしは宿の客引きですよ」

「客引き？あなたが宿を紹介してくれるのですか？」

「そうですね、それが仕事なんですね」

「でも、どうしてボク達が宿を探してるって分かったの？」

「まあ、言い方は悪いですが、この時間にポケットとこんな所で立っている人間は稀まれなんですね。

そんな稀な人間はだいたい同じ理由で居るもんなんですよ」

「なるほど、そういう背景があったから僕達に声をかけたんですね」

「そうですね、まあ、たまたま通りかかった所で『宿』っていう言葉が聞こえたんですけどね」

「あはは、ちゃっかりしてるな、でも助かったね」

「そうですね、ちょうど良かった。そういう事なので、案内よろしく  
お願いします」

「あいよ、それでは着いて来て下さいな」

一礼して向きを変えた客引きの男は、サクサク進んで行くが、時々着いて来るのを確認するようにダスク達の方を見る。遅れずに着いて来る様子に安心した様に、客引きの男は口元に笑みを見せつつ先へと進む。中央通りを後にしてからの進む方向は、どんどん道が細くなつていくと共に薄汚れた建物が目立つようになっていた。

「宿ってこんなところにあるんだね」

「うん、僕も知らなかったから勉強になったよ」

そんな事を言いながら歩くダスク達を連れて、いくつもの角を曲がった客引きの男は一軒の建物の前で立ち止まる。建物には宿屋を示す看板が無いどころか何を扱っているか分からない様子だったが、灯りの漏れる扉の奥からは飲酒を楽しむ声や、料理の匂いが伝わってくる。案内をしてきた客引きの男は、入口の扉を開けて入ると、片手を促す様に広げる。

「いらつしやいませ」

それに応えて店内へと足を進めたダスク達が視線を上げると、いつの間にか静かになっていった店内の客の全員が見ているのが分かった。

思ってもいなかっただ状況に戸惑<sup>とまど</sup>ったダスクは立ち止まり、黒炎も警戒する様な仕草で傍らに寄る。

「おらつ、お前らには関係無いんだから酒でも飲んでろっ！」

焦っているのか、怒っているのか分からない様子で客へと怒鳴ると、客引きの男は愛想笑いを浮かべてダスク達へと頭を下げる。

「すいやせん、ウチの客は無遠慮な奴ばっかりで」

「え、ああ、構いませんよ。少し驚いただけなので」

「そんな事より、ボクお腹空いちゃったよ」

黒炎が言葉を発した瞬間、まだこちらを見ていた周りの客達は顔を見合わせて喋り始める。さすがに分かりやすい反応で自分達を見る客達に、気分を害した黒炎はムツツリと黙り込んでしまった。

「すいやせん、あつしが注意しときますんで」

「お願いします。とりあえず簡単な物で良いので料理を出して下さい」

「まいど、あなたは普通に良さそうだが、その御仁<sup>ごにん</sup>は同じ物で大丈夫かい？」

「大丈夫です、逆に彼のは熱々にして下さい」

無言で頷くカウンター内の男は後ろで煮込んでいたスープを皿に注いで持つて来る。黒炎の分は注文通りに別の鍋に分けて熱々にしてくれた。さびれた店構えの割にスープの味は文句の付け様が無く、黒炎もある程度機嫌が良くなったように尻尾が満足そうに振られていた。

食べ終わりに合わせて出されたカップの水を流し込み、満足そうに鎧の腹辺りを撫でたダスクは、黒炎も食事が済んでいるのを確認してから促すように客引きの男へと顔を向ける。近くで酒を飲んでいたら客引きの男も心得た様子で頷き返す。

「そいじゃあ宿帳にサインをしちまってくださいな。すぐに部屋に案内しますんで」

カウンターに居た別の男から宿帳を受け取った客引きの男は、ダスクヘインクに浸けたペンを渡してくる。宿帳と入れ替えて食事代と

前払いの宿代を渡す。ダスクがサインをして返した宿帳をカウンターへと放った客引きの男は、部屋まで案内するらしく、着いて来いという仕草をしてから歩き出した。

ギイ、ミシイ

案内する客引きの男に次いで木製の階段に足を乗せた瞬間、ダスクの足の下から木の軋む様な嫌な音が聞こえてくる。慌てて足を戻したダスクは、困惑したように客引きの男を引きとめた。

「あの、申し訳ないのですが1階に有る部屋に変えてもらえないでしょうか」

「あぁっ!?!?・・・ゴホン、どうかしやしたか?」

「見ての通り鎧があるので少々重さがありまして、率直に言いますと階段がもちません」

「は?・・・ちよつと待ってる、相談してくる」

予想もしていなかった事態に、不機嫌そうな顔になった客引きの男は返す口調が荒くなっていたのにも気が付かず、慌ててカウンターの男と相談を始める。

「・・・せつかく・・・になる・・・」

「・・・1階は・・・裏の・・・」

小声で話し合う二人の様子に申し訳ないと思いつつ、見知らぬ町で今から新しく宿を探すのが困難だと考えたダスクは客引きの男に近寄る。

「あの、ちよつといいですか?」

「ん?ちよつと待っていてくれ、今話してる」

「ですから、その事についてです」

ハツとした顔でダスクの方を見た男達は、何か勘違いしたかのようで慌てた様に詰め寄ってくる。

「お客さん、待っていてくれ、今なんとかするから」

「あ、いえ、違つんです」

1階で僕達が横になれるスペースがあるなら物置小屋でも構わないうちでお願いしようかと」

「なんだそういう事か。本当にいいのか？裏に大丈夫そんな物置があるが」

「はい、こっこの都合で悩ませるのも悪いので」

「すまねえな、宿代は安くしとくぜ」

「ありがとうございます」

安心したダスクと、何故かホツとした顔になった宿の男達は安堵の息をつく。宿代の差額を受け取り、再び案内をする客引きの男の後に着いて行くと、今度は裏口へと案内される。扉を開いて進む後ろ姿を眺めながら、先程から無言の黒炎にダスクは小さな声で話しかける。

「どうしたんだい？さっきから黙ったままだけど」

「ん？ちよつとね、後で話すよ」

出てきた宿屋よりも更にくたびれた感じの小屋の前で止まった客引きの男の姿に、黒炎は会話を止める。ダスク達が側に来るのを待って、客引きの男は入口の鍵を外した。

「ちよつとボロいけど我慢してくれ。邪魔だったら中の物は自由に動かしちまっでいいぞ」

「分かりました、ありがとうございます」

「ゆっくり寝てくれ」

そう言い戻って行く客引きの男の背中を少しの間見ていた黒炎は、ダスクが開いて待つ扉を抜けて奥へと入っていった。小屋の扉が閉まり、真つ暗になった裏口の扉の前で立ち止まっていた客引きの男は、ダスク達が確かに小屋へと入ったのを確認していたかのようにしばらく見てから宿へと入った。

宿で話をしているうちに拡がったのか、月を隠した厚い雲は辺りを尚一層暗闇に閉ざしている。加えて吹き始めていた風は湿り気を帯び、遠からず雫を落とすのではないかと思える雰囲気になっていた。

ガタガタガタッ

物置小屋の中では背囊から出したランプの灯りに照らされたダスク

が、乱雑に置かれていた木箱や麻袋等を端へと動かしている。床には埃が積もっていたので、動く度に舞い上がるそれに黒炎が嫌そうな顔をしていた。

「ねえ、ボク達、ちゃんとしたベッドの有る部屋で寝る予定だったよな」

「しょうがないだろ、僕の鎧のせいでこんな所になっちゃったのは悪いとは思っけど」

「ここがボロ過ぎるだけだと思うよ。普通の建物ならかるうじて重さにも耐えられるんじゃないかな」

「まあ、そうかもしれないけど、今は屋根の有る場所で寝られるだけで良ししようよ」

「はあ、文句言ってもしょうがないか。とりあえず広さはそれなりにとれそうだし。」

それにさつき外に出たときに風が湿っていたからね」

「良かった、少しはましに思える事があったね。そういえば、さつき話を止めたけど何だったんだ？」

「うん、ちよつとね・・・」

途中で言いよどむ様な仕草で何か考えていた黒炎であったが、心を決めたらしく真剣な瞳でダスクの顔を見る。

「なんか、変じゃなかった？」

あの宿に居た人達もそうだけど、それ以上にボク達を案内してくれた客引きの人の態度とか」

「そう？僕は別に気にならなかったけどな。」

ほら、建物も傷んでるし、客を集めるのに必死だったんじゃないかな」

「そうなのかな、うん、ボクの野生の勘がピンピン反応してるんだけど」

「野生って・・・僕達と一緒に住んでたんだから野生じゃないって。」

でも黒炎の感覚も馬鹿に出来ない時があるからな、大丈夫だとは思っけど注意はしておこうか」



そう言うダスクの言葉に黒炎は嬉しそうに尻尾を振る。それを見て笑顔を見せたダスクは、外していた兜を再び装着すると、鎧のまま寝る事に決めたようで、そのまま壁を背に座ると手の届く位置に装備類を置く。黒炎はその傍らに來ると、背囊を背負ったまま丸くなる。

「おやすみ」

「おやすみ」

お互いに言葉を交わし、黒炎は目を閉じるや否や睡眠に落ちる。その様子に笑みを見せてからランプの火を消し、自分の背囊にしまつとダスクも同じ様に目を閉じる。真つ暗になつた小屋の中にはダスク達の寢息だけが聞こえていた。

ガタガタツガタツ

深夜になり風が強くなつて建物の戸や窓を揺らす音が鳴っているが、次第に強くなつてきた風の音にかき消されそうになつている。寢静まつている町に起きている人間は居ないだろうと、もし誰かが見ていたら思いそうな時間帯ではあつたが、不意に宿の裏口が開かれる。そこから顔を見せたのはダスク達を案内した客引きの男であつた。辺りを見回し、物置小屋の方を注意深く観察していたが、静かな様子に納得して身体も外に出す。その後ろにはカウンター内に居た男も一緒であつた。

ポツツ

ふと頬に落ちた感触に手をやると、客引きの男の掌は少し濡れていた。

「雨が、音を消してくれるから都合だな」

「ああ、仕事をするには良い天候だ」

闇にまぎれる二人は、そう小声で話しながらニヤリと笑う。その手には物騒な物が握られていた。闇の中では判別しづらいが、太く頑丈そうな棍棒には何か黒っぽいシミがこびり付いている。頷き合つた二人はゆつくりと忍び足で物置小屋へと向かう。背を向けた二人の腰のベルトには大振りのナイフが差し込まれていた。扉に耳を付

けて内部の音を聞いていた客引きの男が手で合図をした後に、再び二人は頷き合った。鍵穴に油の様な物を差し、音を立てずに開錠するやいなや扉を開いて飛び込むと、目の前には闇に目が慣れていてもなお、影にしか見えない二つの膨らみが床に並んで横になっていた。

ドガツボグツ

二人は同時に飛びかかると、大きい方の影には頭部らしき場所を乱打し、小さい方の影には1発殴った後に捕獲する様に押さえつける。二つの影は最初の一撃で失神してしまつたかの様にピクリとも動かない。大きい方の影に馬乗りになつた客引きの男は、そのまま頭部らしき場所を殴り続ける。

グシャツ

何かが潰れる様な音が室内に響き、客引きの男の手にも何かを潰した手応えが伝わってきた。そこでやつと手を止めると、男達は顔を見合わせてニヤリと笑う。

「くつくつくつ、やつたぜ、息の根を止めてやつた」

「こつちも一撃で気を失つたらしい、ピクリとも動かないぜ」

「おいおい、せつかくの売り物なんだ、殺して無いだろうな」

「安心しろつて、それくらいの加減は出来る。なにしろ慣れてい  
からな」

嫌な感じに笑いあふ二人の様子は、殺しを何とも思っていない様子がありありと窺うかがわれた。

「おい、灯りを点けるよ。真つ暗じゃ戦利品も確認できない」

「そうだな、あのくすんだ黒色の鎧も骨董品屋に高く売れそうだし  
な」

そう言つて、慣れたように天井に吊つてあつたランプに火を灯ともす。ランプの灯りに照らされた室内は人が動いたので埃が舞い、積み上げられた木箱や麻袋の薄汚れた様子がはっきりと見える。少し咳き込みながら自分達の成果を確かめようと、先程まで影だつたモノに視線を向ける。

「は？」

二人の男達は目の前にあるモノが何であるか理解できなかった、というよりは理解したくなかった。

元々ここに放り込んであった麻袋や毛皮がまとめられて置かれ、その上に毛布が被せてあり、まるで何かが寝ている様に形を整えられている。小さい方は毛皮が多く使われ、大きい方は頭の位置に麻袋に入れられた何かが潰れ、何か液体を染み出させている。その色は埃で汚れているだけで、赤黒くも無く、血液からは程遠い色をして、どこか果物の様な匂いが漂ってくる。

ボタンツ

安心していた二人の男の背後から突然扉の閉まる音が聞こえてくる。ビクリと身を震わせ恐る恐る後ろに振り向く二人の男の目に、信じたく無い光景が飛び込んでくる。

「な、な・・・」

そこには完全武装のダスクと、獲物に飛び掛る直前の様に身体をたわめた黒炎の姿があった。ダスク達には全く怪我が無く、自分達が騙されたのだと、男達はようやく理解する。安心していただ男達の顔には一転して怒りの感情が噴出し、悔しそうに奥歯をギリギリと音が鳴るくらい強く噛み締める。

「・・・何で分かった？俺達が襲ってくる事を」

油断無くダスク達の方を睨みながら、二人の男達は棍棒を持ち替えて手の空いた方の腕を背後へとまわす。怒りの顔から冷めた顔に変わった男達は、先程よりも迫力のある様子に変わった。

「さつき、この小屋を変な気配が探ってたんだよね。ボクはそういうのに敏感だから」

「ちっ、なるほどな。それで身替りを用意したってわけか、悪天候もこつちだけの味方じゃねえな」

「それにしても、おっちゃん叩き過ぎだよ。ボクのオヤツが台無しだし」

うらめしそうな声で何かの染み出した麻袋を一瞥する黒炎の様子に、

客引きの男は床に唾を吐き出す。

「けっ、そんな事知るかっ！それより、何でお前から完全武装になつてるんだよ」

「簡単な話だよ、それも黒炎が、あんた達の様子が少し変だつて教えてくれたんだ」

「てことは、お前は変だつて思つてなかつたんだろ、何で簡単に信じるんだよ」

「当たり前だろ、黒炎とは長い付き合いなんだ。僕は家族の言う事を信じる」

そう言つて一步前に踏み出したダスクの背中を、黒炎は嬉しそうに尻尾を振りながら紅い瞳で見る。

「家族、ね。それじゃあ脅しても渡しはしないだろうな」

「当然だろ、だから諦めて欲しい」

「聞けない話だな、おい、やるぞ」

客引きの男が合図すると、二人共に背後から腕を前に戻す。その手には大振りのナイフが握られており、二人の手付きはそれを使い慣れている様子が窺えた。頷き合った男達は、同時に前に出ようと足を踏み出す。しかし、それは果たされる事は無かつた。

ドガッ

何かが見界一杯に広がつたと思つた次の瞬間には、二人の男達は背後へと吹き飛ばされていった。背中一面に感じる痛みに、自分達が吹き飛ばされて木箱の山に激突した事を理解する。しかし、何が起つたのかが分からなかつた男達は、視線を上げて自分達が立っていた場所を見る。その場所には、いつの間にも動いたのか、くすんだ黒色の全身鎧をランプの灯りに鈍く光らせ左腕の装備を身体の前に掲げたダスクの姿があつた。

「ぐっ、てめえ、何しやがつた」

「武器で攻撃してきそうだったから、ちょっと下がってもらつただけですよ」

「二人まとめてそれで押しただけつてのか、まさかそのなりでそん

な動きが出来るとはな」

「どうします？続けますか？」

隙を窺っていたもう一人の男が動こうとした瞬間、右手の装備で機先を制する。先端を向けられた男は身動き出来ない様子で悔しそうな顔になった。その光景を見て観念したのか、ナイフを下に向けた客引きの男は、憎憎しげな表情でダスクを見る。

「くっ、クソがっ！さっさと出て行きやがれっ！」

「ああそうだ、忘れてました。どうして僕達を狙ったんですか？」

「ちっ、人語を解する獣が珍しかったんだよ。金持ち連中に高く売れそうだったからな」

「なるほど、ありがとうございます」

視線を外さずに毛布を回収して後退したダスクは、合図をする様に黒炎に頷く。それを見た黒炎は、器用に扉を開けると雨の強くなってきた外に飛び出す。それを確認して再び視線を戻したダスクは、声に力を込めて男達へと伝える。

「追って来ても良いですが、今度は手加減しませんので」

その言葉を残して小屋を出ると、扉を閉めて黒炎の後を追いかける。ダスク達の姿は雨と闇夜に紛れてあつという間に見えなくなった。

フウ

図らずも同時に溜息を漏らした二人の男達は、立ち上がって身体を動かし、異常が無さそうだと分かって顔を見合わせる。

「どうするよ？」

「コケにされたんだ、ぶち殺さないと気が済まねえ」

「想像以上に手強いぞ、何か手があるのか？」

「くっくっ、同業者やゴロツキ連中、全てに声をかける。追い込んでやる」

「分かった、連絡を回す」

「頼んだぜ、俺はあいつらを追いかける」

「せいぜい死ぬなよ」

そう言っつて、カウンター内に居た男は先に小屋から出ていく。それ

を追う様に、客引きの男は走り出す。その顔には狩りを楽しむ様な残忍な表情が表れていた。

ピーーーー

深夜の雨の町を、雨風の音を切り裂くように呼子の笛の音が鳴り響く。それと同時に大勢の人間の気配が集まりだす。それは、ダスクが黒炎に追い付き、しばらく走ってから始まった。水溜りの雨水を跳ね飛ばしながら走り回る人影を避ける様に、ダスク達は物陰に隠れる。

「失敗したね、あの二人の事縛っておけば良かった」

「そうだね、あれで諦めてくれると思っただけだな」

「これからどうしようか？」

「ここまで大掛かりになると、町を出ないと駄目だろうな」

「やっぱりそうなるか、はあ、最初の町がこんな事になるなんて」

「しょうがないよ、僕達の無知が原因でもあるんだから」

意気消沈した様に肩を落とすダスク達は、しばらくそのままの格好で暗闇の中で動かず、影の様な建物に同化しているかのようであった。

「さて、そろそろ行こうか」

「それがいいね、いつまでも落ち込んでいる場合じゃない」

「また次の町に期待しようよ」

「何も知らなかった僕達への手痛い洗礼だと思えば良い」

「うん、ボク達にとっては勉強になったかな」

「行こう」

頷き合ったダスク達は、周囲の気配を探り、とりあえずの安全を確認して走り出す。建物の隙間を渡りながら目指すのは、街道の先へと進む西門のある方向ではあったが、地の利が無い為、ひとまずは町を囲む塀に突き当たる様に端に向けてまっすぐ進んでいた。追っ手は中央通りと東西の門を重点的に見張っているらしく、塀を目標として入り組んだ区画へと突入したダスク達は結果的には見付かる確率が減っていた。土地勘の無い事が逆に有利に働いたようである。

そのまま走り続けたダスク達は、目の前に黒い壁が見えてきたのに気が付く。一気に壁際へと近付くと、近くの建物の影に飛び込む。緊張感からか、ダスク達の息は荒くなっており、白く染まった二つの塊が空中にかすんで消える。

「やっと着いたね、ボク疲れちゃったよ」

「うん、逃げているってのが悪いのかな、僕もいつもより疲れやすいみたいだ」

「どうする？」

「追っ手の気配が遠いって事は、中央通りとか門は見張られているだろうね」

「だろうね、やっぱりこれしかないか」

そう言いながら、黒炎は塀を見上げる。それに釣られるようにダスクも塀を見上げ、その高さに溜息をつく。

「近くで見ると更に高く感じるな。僕には足場が必要な。黒炎は僕の肩を使えば行けるでしょ」

「そうだね。はあ、まさか本当にこれを越える事になるとは思わなかったよ」

「ははは、言霊ことだまなのかもね。・・・さあ、行こうか」

その言葉と共に塀の前に立つダスクに頷いて、黒炎は走り出す。軽い足取りで跳び上がると、ダスクの肩を踏み台にしてジャンプする。高く舞い上がった身体は、フワリと音を立てずに塀の上に降り立った。

「追っ手の姿はあるかい？」

「居ないよ、後ろにも、壁の向こう側にも動く影は見えない」

「分かった、先に降りてて」

頷いた黒炎が塀の向こう側へと消えるのを見送ったダスクは、近くの頑丈そうな木箱をいくつか積み上げる。高さが足りないんじゃないかないかと思える状態であったが、少し助走をとったダスクは重さに反して音を立てずに軽々と塀の上に立つ。塀の向こう側を見下ろすと少し離れた場所に紅く輝く瞳が見えた。黒炎の位置から地面までの

距離を測ったダスクは、さっきよりも高さがあるので今度は慎重に塀から飛び降りる。

ドンッ

雨でぬかるんだ地面であったが、鎧の重さからか足は地面にめり込み、思っていた以上の音が鳴る。そのままの格好で辺りの様子を窺っているダスクの姿に、軽い足取りの黒炎が傍らに寄った。

「ダイジョブ、音に気が付いた気配はないみたいだよ」

「そっか、まだまだ鍛え方が足りないな」

「うーん、今でも充分鍛えられてると思うけどな」

「まだまだだよ、父さんと比べたら雲泥の差だから」

「父ちゃんか・・・あれはスゴかったよね」

「うん、僕の目標だからね・・・とりあえず町から離れよう」

「そうだね、町の外まで追いかけられたらメンドクさい」

頷き合つてダスク達は町から離れていく。町の方向を見ると、西門の場所には守衛が用意した篝火が辺りを照らしている。おそらくこの時間帯には守衛を無視して門から出る事は出来ないようである。安心したダスク達は、門の位置から街道のある場所の見当をつけて

西の森へと入る。馬鹿正直に街道の通っている門へと向かえば姿を見られてしまうからだ。森に入つてしばらく歩いているうちに緊張感が薄れていたのだろう、ダスク達はそれに全く気が付かなかった。

ドカッ

後ろに注意していたダスクの少し前を歩いていた黒炎が、突然真横に吹っ飛ばされる。声も無く横たわる黒炎の姿に呆然となりながら、その原因となつたモノへと視線を向ける。いつの間に先へと回り込まれていたのか、ニヤニヤした顔でダスクを見るのは、客引きの男であつた。

「落し前をつけさせてもらいに来たぜ。ああ、安心しな、殺してはいいない、商品だからな」

黙つたまま黒炎へ視線を向けたダスクは、その身体が呼吸に合わせて上下しているのを確認して安心する。その様子を楽しそうな顔で



見ながら、客引きの男は右手の長剣をダスクへと向ける。

「まあ、お前には死んでもらうから、関係ないだろうけどな」

「そうか」

低い声でそれだけ言うと、ダスクは両手の装備を構える。それに反応して長剣を上段に構えた客引きの男は、緊張感のある顔であったが、未だに口に笑みを浮かべている。今迄長剣を使って逃した獲物は居なかったからだ。目の前の獲物の大きさは、油断さえしなければ小屋の時みたいに見失う事は無いだろうと、客引きの男は考えていた。

「こいよつ、黒豚っ！」

自分を奮い立たせる様にダスクへと罵声を飛ばした客引きの男の目には、向かってくるダスクの姿がハッキリと見えている。油断をしなければ大丈夫だと確信したかのようにニヤリと笑った。一直線に走り寄るダスクの様子に、がら空きの兜に一撃してふらつかせたとこで止めを刺そうと決める。左手に持っていた棍棒を振り上げると、カウンター気味に兜へ叩きつけた。

ガッ

痺れる様な感触を残して棍棒が砕け散る。立ち止まったダスクの姿を見て、笑みを深めた客引きの男は止めを刺す為に長剣を構えた。

ギンツ、ドガッ

次の瞬間、金属同士のぶつかる様な音と、金属と肉体のぶつかる鈍い音が響く。客引きの男は吹き飛びながら、どうして自分が飛んでいるのか理解できなかった。数メートルも吹き飛んだ後、やっと止まった客引きの男が目を上げると、近くの地面に何か落ちてきて刺さるのを目にする。それが自分の持っていた長剣の刀身である事に気付いて呆然となった。

あの一瞬に何が起きたかといえば、ダスクが右腕の装備を目にも留まらない速さで水平に振り抜いて長剣を叩き折り、無防備な客引きの男の眼前に踏み込んで胸部に左手の装備を叩きつけただけの単純な事である。ただそれが非凡であったのは、それらが一瞬の間に

連動して行われた事であり、踏み込んだ場所の地面には足のめり込んだ跡が十センチ以上の深さの穴を開けていた。

信じられない光景に動けずにいた客引きの男の耳に、ぬかるみを歩く音が聞こえて来た。視線を向けると、ダスクの黒い姿がゆつくりと近付いてくるのが見える。慌てて下がろうとするが、胸の骨が折れているらしく、激痛が走って起き上がる事も出来なかった。

「ひい、た、助けてくれっ、俺が悪かった」

その言葉が聞こえていない風に近付いてくるダスクの姿は、客引きの男の目には黒い死神の様に映っていた。うつ伏せになって這いずる様に下がっていく客引きの男の側に来たダスクは、無言のまま全身の体重をかける様に上から圧し掛かる。

「うがっ、潰れる、潰れちまうよっ、ぐう、死ぬっ……」

想像以上に重いダスクの鎧と装備は、客引きの男をぬかるみに数センチも沈め、更に折れていた骨を砕いていく。何も言えなくなった客引きの男の耳元に兜を近づけたダスクは、低い声で言葉を伝える。「僕の家族に手を出したお前には手加減するつもりが無くなった、後悔しろ」

それは、再び相見<sup>あいまみ</sup>えても手加減するつもりであった事を伝えていた。涙でぐちゃぐちゃになった顔で何かを言いたげに口をパクパクさせる客引きの男であったが、胸を潰されて肺から空気を押し出されてしまった状態では声にもならなかった。そのまま客引きの男が死んでしまうまで続くと思われた拷問の様な時間は、後ろから聞こえて来た声で終わる。

「ボクは大丈夫だから、その辺にしときなよ。おっちゃん死んじやうよ」

ハツとした様子で立ち上がったダスクは後ろに振り返る。そこには心配そうな様子でダスクを見詰める黒炎の姿があった。吹き飛ばされて泥に汚れていたが、怪我をしている素振りも無く、軽い足取りでダスクの傍らへと歩いてくる。

「あ、僕、なんて事を……」

呆然とした様子で肩を落とすダスクの様子に、慰めるように脚に前足を置く。

「今回は運が悪かったんだよ。おっちゃんもやり過ぎだし、キミも手加減出来なかった」

「それでいいのかな？もう少して僕は人殺しになるところだった」

「いいんだよ、ボクが許す。個人的にはボクの為に怒ってくれて嬉しかったし」

嬉しそうに尻尾を振る黒炎の仕草を見て、落ち着く為にダスクは深呼吸を何度かする。その様子に安心した黒炎は改めてダスクへと視線を向ける。

「それでも急がないと人殺しになっちゃうよ、キミは」

「そうだね、急いで町に運んで守衛さんに渡さない」と

ハツとして、ダスクは客引きの男に近寄り怪我の程度を確認すると、気を失っていたが適切な処置をすれば命に関わる状態で無いと分かった。少しだけ安心した様子で息を吐くと、黒炎に向かって頷いてから客引きの男を背負う。怪我に響かない程度に加減して走りながら、ダスクは自分が怒りに我を忘れた時の加減の無さを嘆いていた。

あつという間に町の西門に辿り着いたダスク達は、守衛へと客引きの男を渡す。事情聴取をしてくる守衛には、道の途中で拾ったと伝え、急いでいるという理由でその場を逃げる様に後にした。嘘を吐くのは心苦しかったが、町に戻ると色々面倒な状況になると考えたからであった。町から離れるように、しばらくの間走り続けたダスク達は、頃合をみて休憩の為に杉の原木の下へと逃げ込む。雨でずぶ濡れになったダスク達は、体温も奪われて余計に体力を奪われていたからだ。白く漂う荒い呼吸を収めるように深呼吸を続け、ある程度呼吸が落ち着いたところで背囊の中から乾いた手拭いを二枚出す。防水加工をした自作の背囊であったが、その能力を余す事無く發揮して、少しも雨が染み込んでいなかった。一枚目で黒炎の身体を拭った後、装備を全て外したダスクはまずはそれで装備から水分を拭う。それから服を脱ぎ二枚目の手拭いで全身を拭ってから着

替えをして、最後に装備を付け直した。乾いた薪も無い状態では焚き火で暖まる事も出来ず、身を寄せ合いながらダスク達は雨が止むのを待つ事にした。

なかなか雨は止まず、それどころかますます激しくなる。そのまま少なくとも時間が経ったところで、物語は冒頭の状況になる。

ザザザッ

草むらを突き抜けながら走るダスク達は、激しい雨で見通しの悪くなった森の中を奥へと進んでいく。しばらく走っていてもなかなか良さそうな場所が見付からない。足は止めないが、諦めかけた心にくじけそうになった瞬間、稲光が光り、ダスクの右手にある岩山の斜面にある洞穴が目に見え込んでくる。

「あつち、洞穴があつた、ついて来て！」

それだけ言つて、急角度に曲がると、ダスクは先導する様に洞穴の見た場所へと向かう。見間違いだったら、という不安にかられそうになったところで洞穴の黒々とした入口が見えてきた。走るスピードを上げたダスク達は、その勢いのまま飛び込んでいく。

「やった、ここなら大丈夫そうだね」

「うん、ついてない事ばかりだったけど、僕達にも少しは運が向いてきたかな」

ダスクは笑顔になり、黒炎も嬉しそうに尻尾を振る。やっと一息つけた様子で息を吐き出した瞬間、ダスク達の背後、洞穴の奥から物音が聞こえてきた。

カランツ

誰かがうっかり足で蹴り飛ばしてしまった、という感じで小石が転がってダスク達の目の前に落ちてくる。

「誰だっ！」

誰何の声を上げたダスクの硬い声に、本当に何者かが居たらしく、息を呑む様な音が聞こえてきた。ダスクと黒炎の向ける厳しい視線

に観念したらしく、洞穴の奥から近付いてくる足音が聞こえてくる。その音は軽く、恐れを感じる心細さの様な物が感じられた。

洞穴の奥から近付いてくるのは何者か？悪い事が続いた為、ダスク達は厳しい顔で油断無く身構える。激しくなる雨風に包まれた森は暗い未来を暗示しているかのようで、洞穴の奥を睨む顔にはうんざりとした表情があった。果たして新たな登場人物はダスク達に幸と不幸、どちらをもたらすのだろうか。

無知と出会い（前編）（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰える様に頑張ります。

無知と出会い（後編）（前書き）

前話と同じペースで投稿できました。次回も続けられるように頑張ります。

無知と出会い（後編）

ザッ、ザッ、ザッ

ゆつくりとしたペースの軽い足音で洞穴の奥から何者かが近付いてくる。警戒した様子で音の聞こえて来る方向を見るのは、くすんだ黒い鎧を装備して両手に巨大な装備を持ったダスクと、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きな尻尾を持つ艶やかな黒い毛皮の獣でルビーの様に紅く輝く瞳が特徴的な黒炎である。黒炎は雨で毛が濡れて身体に張り付き、毛の先からはポタポタと雫が滴っている。暗い洞穴の入口から入ってくるかすかな稲光に照らされた地面の上に、洞穴の奥から出てきた何者かの足の先が見えてくる。予想に反して小柄な足の持ち主は、そのままダスク達の目の前まで歩いて止まると、上に被っていた外套がいとうを外す。驚いた事に、現れた人物はダスクと同年代の少女であった。驚きで固まっていたダスク達の様子を勘違いしたのか、現れた少女は諦めた様子でその場にしゃがみ込む。

「はあ、よりもよって今日が最悪の日になるなんて・・・」

無言のまま自分を見るダスク達に何を思ったか、手に持っていた荷物と小振りのナイフを目の前に置く。

「無駄だと思うけど、持ち物はこれだけです。見逃してもらえませんか？」

そんな事を言い出した。どんな状況になっているのか、この時点でやっと理解したダスクは慌てた様に両手の装備を放り出し、手と一緒にに首も振る。危うく装備に潰されそうになった黒炎は、その場を飛び退いて文句を言いかけたが、思い直して口を閉じる。

「ち、違います。僕達は雨宿りに寄っただけで、そんなつもりは全然ありません」

うるたえるダスクの様子を疑わしげな表情で見ながら、少女は置いた持ち物を回収して立ち上がる。

「本当かしら？油断させといてズバツとやるんじゃないの？」



「そんな事しないよっ！はあ、ホントについてない事ばかりだ・  
」  
ガツクリと肩を落としたダスクは、脅かさないように装備を拾って  
隅に置くと、兜を脱いで顔を見せる。ボサボサの黒髪から覗く黒い  
瞳は優しそうな性格が現れていて、それを見る少女にもどこか安心  
させるモノを感じさせた。

「ふん、そんな顔してたんだ。私と同じ位の年齢だったのね」

「こんな顔で悪かったね。まあ誤解だと分かってくれたみたいで良  
かった」

「まだ分らないわよ」

「そんなあ」

困った顔をしたダスクの様子が面白かったのだろう、笑顔になって  
手を軽く振る。

「ウソウソ、私にも人を見る目くらいはあるわ」

「勘弁してよ・・・」

誤解が解けたらしい少女の様子に安心したダスクは、荷物の中に燃  
やせる物が無いか漁り始める。使えそうな物は、鍛冶にも使う炭く  
らいであった。予備のつもりで持っていた物なので濡れた身体を暖  
めるだけの焚き火にするには量が圧倒的に足りなかった。困ったダ  
スクは、洞穴の内部に燃やせる物が落ちていないか探し始める。そ  
れを見ていた黒炎も、心得たようにダスクを手伝う。

「何やってるの？」

「ん？濡れた身体を暖めたくて、焚き火に使えそうな物が無いか探  
してるんだよ」

「そうなんだ、だったらこれを使うといいよ」

少女が荷物の中から出してきたのは乾燥した苔の塊だった。受け取  
ったダスクは、ひっくり返したりして確かめると少女の方へ視線を  
向ける。

「この苔、燃えやすそうだけどすぐに燃え尽きちゃうんじゃないの  
？」

「大丈夫よ。この辺りでは薪の代わりに使ってるし、火もゆつくりまわるから長持ちするの」

「へえ、便利な物もあるんだな」

そう言ったダスクは、苔と炭を組み合わせて焚き火を熾す。空気は湿っていたが、苔は火が点き易く、あつという間に炭も赤くなる。

洞穴の内部の空気が暖められ始め、ダスク達はやつと安堵の息を吐いた。

「ちよつと着替えたりしたいから奥に行くけど、焚き火の面倒よろしくね」

「いいわよ。なんだつたらここで着替える？」

笑顔でそんな事を言う少女の顔を眺めながら、見た目は大人しそうなのに性格は違つんだな、と思いつつ溜息を吐くダスクであった。

荷物を持つて洞穴の奥に向かったダスク達は、焚き火の光がかかるうじて見える場所で立ち止まる。背囊から手拭いを二枚出したダスクは、一枚目で黒炎の身体を拭きながら小さい声で会話をする。

「あの娘が居るから喋らなかつたんだよね？」

「うん、失敗したばかりだったからね。ちよつと用心しておこうかなって」

「なんとなく大丈夫そうな気がするけど、黒炎はどう思った？」

「まあ、嫌な気配は感じないからイイヒトかもね」

「戻ったら自己紹介でもしとこうか」

「そうだね。ボクも黙つたままなのはイヤだし」

黒炎を拭き終わったダスクは、装備を全て外した後にそれらを一枚目の手拭いで拭う。それが済んでから服を脱ぐと、二枚目の手拭いで身体を拭いてから乾いた服に着替える。手拭いを搾り、兜を除いて装備を付けると、少女の居る場所へと戻った。立て掛けた装備等に濡れていた服や手拭いを少しでも乾くようにと、掛けて干す。冷えた身体を暖める為に、焚き火の傍にダスク達は座った。少女の方を見ると、火にヤカンをかけてお湯を沸かしている。お茶でも飲むのだろう、と思つて少女から視線を外したダスクは、黒炎の乾いて

きた毛皮を撫でる。黒炎は気持ち良さそうな様子で丸くなっていた。「ねえ、お茶淹れたから飲みなさいよ。暖まるわよ」

差し出してきたカップを見て、自分の背囊からカップと黒炎用の皿を出す。

「ありがとう、君も飲んだ方がよいよ。僕と黒炎の分はこっちをお願い」

「カップが一つだったからどうしようかと思ってたの。自前のがあるなら丁度いいわ」

改めてダスク達の器にお茶を注ぐ少女の様子は、何も企んでいないと思える自然さだった。熱いお茶に舌鼓を打つ黒炎に、最初は驚いていた少女だったが、すぐに楽しそうに追加を注いでいたりした。

「これって何ていうお茶なんだい？美味しいし、香りも良いね」

「ふふつ、これは私のオリジナルなのよ。薬草学を勉強してるから詳しくなっちゃって」

「へへ、君きみって偉いんだね。どうにも僕は勉強が苦手なんだよ」

「ふふつ、貴方あなたは見た目通りなのね」

「どういう意味だよ・・・」

不貞腐れた様子になったダスクを見ながら楽しそうに笑っていた少女は、ふと真面目な顔になってダスクを見る。

「あのさあ、君とか貴方とかってのやめない？」

「ん？どういう事？」

「貴方って良い人っぽいし、自己紹介して名前でも呼んでもいいかなって」

「ああ、さつき僕達もそう思ったんだよ。ちょうど良かった」

姿勢を正して向き合うダスクと少女、黒炎も首を上げて自己紹介に参加するつもりのもりのようであった。

「まずは言い出した私からいくね。私の名前はフローラル・グリーン。」

フローラルって呼んでも良いけど、友達は何、ローラって呼ぶわ」「よろしく、ローラ。僕はダスク・ウォール。ダスクって呼んでく

れば良い」

「ボクは黒炎だよ。よろしくね、ローラ」

「よろしく・・・ええっ！今話したのは誰？もしかして貴方なの？」  
順番に自己紹介していった流れに乗って、ちゃっかり加わった黒炎の言葉に驚いたフローラルは、目を見開いて黒炎の紅い瞳を見る。  
驚いても恐怖等の負の感情は出なかつたらしく、珍しいものを見た時の反応でマジマジと黒炎を見ているようだった。その様子に安堵したダスクは、笑顔で黒炎達のやりとりを眺めている。

「言葉を喋る動物って初めて見たわ。ちよつと撫でてもいいかしら？」

「いいよ。そろそろ乾いた頃だし、毛並みはボクの自慢だからね」

「ありがとう」

恐る恐る手を伸ばして黒炎の頭に手を乗せたフローラルは、感触を確かめる様にゆっくりと撫でる。すぐに毛の感触を気に入ったらしく、頭から背中にかけての広い範囲を撫で始めた。

「すごく滑らかで気持ちの良い感触だね。黒炎君の言った通りね」

「ふふん、そうでしょ。それと、君は要らないよ。呼び捨てでいいからね」

「分かったわ、黒炎。私とお友達になつてね」

「もう友達だと思ってるよ。ダスクも同じだと思っ」

その言葉に嬉しそうな顔になったフローラルは、ダスクの顔へ視線を向けて確かめる様に見詰める。

「うん。僕もローラの事を友達だと思ってる。僕達、君の事をローラって呼んでるだろ？」

「ありがとう。改めてよろしくね、ダスクに黒炎」

「よろしく、ローラ」

握手をしながら改めてフローラルの方を見る。フローラルは、明るい栗色のロングヘアを一つに縛って無造作に背中に流し、明るい翠の瞳が魅力的な可愛いというよりは美しい顔立ちをした女の子で、服装はこの地方ではポピュラーな素朴なデザインの服を着ている。

最初に会った時の上から被っていた外套は、今は彼女の傍らに置いてあった。

「そういえば、ダスク達はこんな場所で何をしていたの？」

「う、言わないと駄目かな？」

「私達つて友達だよ」

「あはは、キミの負けだね、ダスク」

「はあ、聞いても面白くないと思うよ」

「それを判断するのは私よ」

どうやっても引きそうにないフローラルの様子に、ダスクは溜息を吐くと、少し前まで居た町で起きた事を語って聞かせた。他人が聞いても面白くないし、呆れるだろうと思っていたダスクは、フローラルが怒った様な顔になっているのを見て驚いた。

「許せない。何も知らない人間を騙して金品や命を奪おうとするなんて」

その言葉に、ダスクは少し救われた様な気がした。黒炎も嬉しそうに尻尾を振っている。嫌な事だけで一日が終わっていたら、これから先の旅も先行きが不安だけになってしまっただろう。この出会いは忘れられないモノとなる、ダスクと黒炎はそんな予感がした。

「それで、ローラもこんな場所で何を？」

「私は薬草の採取に来たの。さっきの苔もついでに拾ってきたのよ」

「それにしても、こんな時間にどうしてここに居たんだい？」

「夜中から早朝に採取しないといけない薬草もあつたら。でも途中で雨が降ってきちゃて」

「なるほど。それじゃあ近所に住んでるんだね」

「ええ、私の村はここから少し南に行った所に有る、フラウガーデンよ。薬草が有名なの」

「フラウガーデンか。僕達の村は知らないだろうけど、ノースアタロスって名前」

「聞いた事あるような・・・ずっと北にある村よね」

「うん、スゴク遠いよ。山奥のド田舎だから雪くらいしかない。あ

と猛獣かな」

「ふふつ、一度くらい見てみたいかも」

「機会があったらね」

会話を続けていくうちに、眠くなってきたのだろう。口に手を当て欠伸をするフロールルの様子を見て、ダスクは声を掛ける。

「眠っても良いよ、僕が周りを見てるから。黒炎に抱きついてれば暖かいから眠れると思う」

「いいの？お言葉に甘えさせてもらおうかしら。さすがに眠くなってきたから」

「僕は慣れてるから大丈夫」

「ありがとう。ふふつ、私が可愛いからって襲っちゃダメよ」

「ったく、しないっての」

悪戯っぽい表情で言うフロールルの言葉でダスクは仏頂面になる。

その顔を見たフロールルは更に楽しそうに笑った。話題に出ていた黒炎は、既に会話の途中で丸くなって熟睡していた。

「それじゃあ、おやすみなさい。わあ、黒炎つてば暖かい」

抱きついたフロールルの感触に、少し不機嫌そうに動いた黒炎であったが、すぐに何も無かったかのように動かなくなる。しばらく笑顔で艶やかな黒い毛に頬擦りしていたフロールルだったが、疲れていたようで、すぐに眠りに落ちる。その様子を笑顔で見ていたダスクは、フロールルに毛布をかけてから視線を焚き火に向ける。洞穴の外から聞こえる雨風の音と薪の爆ぜる音を聞きながら一連の出来事を思い返す。町での出来事は苦い気分させるが、一番心に痛みを感じるのは我を忘れて主犯の男を半殺しにしてしまった事だった。自分の未熟さを実感したダスクは、身体と共に精神も鍛えていかないと本当に強い人間にはなれないのだと痛感させられた。

ピチヨン

ウトウトしていたダスクの首筋に洞穴の天井から落ちてきた水滴がぶつかる。その冷たさにビクリとして顔を上げ、辺りを見回すと黒

炎とフローラルが眠っているのが見えた。焚き火はだいぶ小さくなっていたが、かろうじて身体を暖めてくれていたようだ。洞穴の外からは早朝の弱い陽の光が入ってきていて、激動の夜が明けたのが分かる。音を立てない様に立ち上がったダスクは、静かに洞穴から外に出る。雨風はすっかり収まり、冬の冷たくピリツとした空気が呼吸と共に胸に満ちて、眠気を吹き飛ばした。

「おはよ〜」

凝り固まった身体を解す<sup>ほく</sup>ように動かしていたダスクの背後から、機嫌の良さそうな黒炎の声が聞こえて来る。伸ばしていた腕を降ろして後ろを振り返った。

「おはよう。良く眠れた？」

「うん。ローラが居たから暖かったし、薬草の匂いのせいか気持ち良く眠れたよ」

「なるほど。そういえば毛布はちゃんとかかかってたかい？」

「ダイジョブ、来る時直してきたよ」

「そっか」

頷いて再び身体を動かし柔軟を始めたダスクを見て、黒炎も身体を解し始める。弓なりに反らされた背とピンと伸ばされた四肢は見ている者に、とても気持ち良さそうな印象を与える。

「これからどうしようか？」

「町に寄るかどうかい？それは話し合う事じゃないと思うけど」

「確かに全く町に寄らずに進むのは不可能だからね」

「大丈夫だよ。ボク達が気を付ければなんとかなるよ」

「うん。街道の通る町に全部寄る必要もないし、問題ないか」

「なにが、ふわぁ、問題ないのかしらあ？」

予想していなかった人物の声が突然割り込んできたので、ダスク達は背後の洞穴の方へ慌てて振り返る。そこには毛布を肩に掛け、眠そうな顔の口元に手を当てて欠伸をするフローラルの姿があった。

寝起きが悪いらしく、ボサボサの髪と半分閉じた目でフラフラしている。キチンと起きている時とのギャップが感じられて、思わず笑

顔になるダスク達であった。

「おはよう、良く眠れたようだね」

「うん。黒炎が暖かくて気持ち良く眠れたわ」

「それはよかった。ボクも枕になったかいがあるってモンだよ」

「それで、何が問題ないのかしら」

早朝の冷えた空気と、ダスク達との会話でフローラルは完全に目が覚めたらしく、先程の言葉を重ねて言う。ダスクと黒炎はどうしようかと顔を見合わせて数瞬視線で会話をしている様に見えた後、同じ考えであつたらしく頷き合う。

「昨日の事があるから、できるだけ町に寄らないで行こうかなって話してたんだ」

「ボク達、なんでか分からないけど目立つみたいなんだよね」

「うん。僕の他にも似たような武装をしている旅人が居るってのにな。」

黒炎だつて羽とかが生えてるわけじゃないし」

「ぷっ、あははは」

突然笑い出したフローラルに呆気に取られた様子になったダスク達は、すぐに不機嫌そうな顔になる。

「なんだよローラ、笑うなんて酷いじゃないか」

「ごめん、ごめん。なんか知らないのは本人達だけっていうのが……」

「ごめんなさい、何でもないの」

不思議そうな顔で自分を見るダスク達に、軽く頭を下げた謝るフローラルの顔には優しそうな微笑が浮かんでいた。

「それなら馬車とかに乗って行けばいいんじゃない？せっかくの町なんだから楽しまないと」

「うーん、それはそうなんだけど……ちょっとこっちに来てくれるかい」

少し困った感じの顔になったダスクは、フローラルを促して洞穴に戻る。昨日外しておいた装備の近くに歩み寄ると、何か考えてから



兜を持って焚き火の近くに座る。フロールが近くに座ったのを確認したダスクは、その傍らに兜を置いた。

「ちよつと持つてみて。あ、見た目以上に重いから気を付けないと筋すじを痛めるかも」

「大げさじゃない？こう見えても私、力は強いのよ」

笑顔のままウインクしたフロールは地面の兜に軽く手を添える。息を大きく吸って止めると、えいっという風に力を込めて持ち上げようとする。顔を真っ赤にして力を込めるフロールではあったが、兜はピクリとも動かなかつた。

「うむむむ、あれ？ちよつと待つてね。ううぐぐぐ、駄目、持ち上がらないわ」

信じられないという顔になったフロールは、重い手ごたえだった手とダスクの顔を交互に見る。その様子に笑顔になったダスクは、兜を軽々と持つと他の装備の傍らに置く。

「僕の装備は全部同じ素材で出来てる。

だからちよつと重いんだよね、普通の馬車が壊れたり、不具合が生じたりするくらいは」

「重そうに見えていたけど、まさかこんなに重いとは思わなかつたわ」

「そうだろうね。ボクだって知らなかつたら同じ事を思うよ」

いつの間にか焚き火の側で丸くなって見ていた黒炎が会話に入ってくる。その様子を横目に、フロールは何事かを考えているようである。邪魔をしないように黒炎に目で合図したダスクは、燃料を足し焚き火の火を大きくして湯を沸かす為にヤカンをかける。背囊から携帯食料を出して簡単な朝食を用意していたところでフロールは顔を上げてダスク達を見る。

「そうだ、船がいいかも。途中の町は長居出来ないままだけど、船に乗れば長い距離を進めるわ」

そう言うフロールに、朝食を手渡し、彼女のカップにお茶を淹れる。ありがとう、と言いなながら朝食を食べるフロールの様子を見

ながら少し考えていたダスクは彼女に視線を向ける。

「なるほど、大きめの船なら乗っても大丈夫そうだ。黒炎はどう思う？」

「そうだね、良いアイデアかも。それに船にも乗ってみたいし」

「そういえば船には乗った事が無いや。移動手段であるけれど、それはそれで楽しみだな」

嬉しそうに話すダスク達をフローラルは満足そうな顔で見る。

「ここから街道沿いに西に進んで1〜2週間で港町に着くと思う。

それまでは町には食事や必要な物を買う時くらいに寄れば大丈夫じゃないかしら」

「そうだね、そうしよう。ありがとう、ローラ」

「ローラ、ありがとう」

「お礼なんていいわよ。友達が困っていたら助けるのは当然でしょ。いつも私はそう思ってるの」

照れた様子で少し頬を赤くしたフローラルは、ダスク達の感謝の視線から逃れるようにカップに視線を落として食事に戻る。それを見た黒炎は楽しそうに尻尾を振りながらダスクに視線を向ける。

「ローラったら照れちゃって、可愛いトコもあるんだね」

「そうだな。強気な性格だと思っていたけど、照れる事もあるらしい」

「なによ、もう！私だって人並みに照れたりするわよっ」

拗ねた顔でソツポを向いたフローラルを見て、ダスク達は笑顔になる。いつまでも笑っているダスク達の様子に、諦めた様に溜息を吐いたフローラルは苦笑いになる。そこからは朝食を摂りながら適当な話題を交わし、皆が笑顔で朝のひと時を過ごした。

朝食も済み、お茶を飲んで一服した一同は、ゆっくりとした動作で出発の準備を始める。太陽も完全に山の稜線から顔を出したので、陽が出ているうちに長時間の移動するには早めに出発する必要があるからだ。兜以外の鎧を装備したダスクは手際良く焚き火の跡を片付け、黒炎達に洞穴の外に出るように促してから荷物を持つと、

忘れ物が無いか確認してから最後に洞穴を出た。

「とりあえず森を出る所までは一緒に行きようか」

黒炎達から反対の意見が出なかったので、ダスクは一つ頷いてから最初に歩き出す。遅れて歩き出したフローラルは、小走りになって黒炎を挟んで横に並ぶ。朝の森は雨上がりで濃い緑の葉も青々として目に優しく、空気も新鮮で冷たいので呼吸をする度にリフレッシュする様で、地面がぬかるんでいなければ最高の散歩場所になりそうであった。実際、黒炎は足が濡れるのを嫌がって可能な限りぬかみを避けていた。しばらく歩くと視線の先に木々の途切れている場所が見えてくる。やっと森から出られると、ダスク達は早足になって出口に向かった。

森から出た所は一面牧草地らしく、刈った牧草の跡が広がっている。今が冬ではなければ目にも眩しい緑の絨毯が見られたのだろうと、少し残念に思うダスクであった。街道は北の方角にあるらしく、遠くに人や荷車の姿がちらほらと見える。南の方角、それ程険しくない山の麓には小さく建物の集まっている場所が見える。恐らくはあそこがフローラルの住んでいる村、フラウガーデンなのだろう。ダスクの視線に気が付いたフローラルは、自分も同じ方向に視線を向ける。

「そうよ。あそこが私の村、フラウガーデン。小さいでしょ」

「小さいけど、ノースアタロスよりは大きいよ」

「だね、ウチの村はド田舎だから」

そう言う黒炎に少し非難する様な目を向けるダスクであったが、諦めた様に溜息を吐いた。その様子を楽しそうに見ていたフローラルであったが、表情を真剣な物に変えるとダスク達の前に回って顔を向ける。

「それじゃあここでお別れかな」

その言葉に、ダスク達も表情を改めるとフローラルと視線を合わせる。

「そうだね。残念だけどここでお別れだ」

「ちょっと寂しいな。ボク達の事忘れないでね」

「忘れないわ、友達なもの。ダスクと黒炎の方が忘れちゃうんじゃない？」

「忘れられないよ。」

悪い事だけで終わりそうな1日が、ローラのおかげで良い日だったと思えるんだから」

「うんうん、ボクもローラに会えて良かった」

「ありがとう。私も貴方達に会えて良かったわ」

表情を笑顔に変えて籠手を外したダスクは握手の手を差し出す。それを見たフローラルも笑顔になってダスクの手を軽く握った。握手をした手が不意に重くなったのを感じたダスクとフローラルがそちらへと視線を向けると、黒炎が前足を伸ばして握手の手の上に乗せているのが見えた。

「ボクを忘れたら困るよ」

ダスクと黒炎とフローラルは顔を見合わせて楽しそうな顔になって笑い合う。笑いが一段落したところで手を離れたダスク達は改めて視線を合わせる。その表情は別れの場であつたが笑顔のままだった。「またいつかどこかで会いましょう。だから『さよなら』は言わないわ」

「うん。また会えるのを信じてるよ」

「またね、ローラ」

ダスクと黒炎は手を振りながらその場でフローラルを見送る。フローラルも手を振りながら村へと向かい、何度も何度も振り返りながら歩いていく。お互いの顔が判別できなくなる位離れたところで、ダスクは兜と籠手を付けてから黒炎を促すと、背を向け街道へと歩き出した。

それからの道中はフローラルの考えてくれた案の通り、町に寄りながら出来るだけ目立たない様にして進んで行った。宿に泊まるのが何となく嫌だったダスク達は、やり慣れた野宿をしながら進む。

幸い、最初の町を除いてトラブルに巻き込まれる事も無く、それぞ  
れの町で美味しい物や名物等を楽しみながら旅をする事が出来た。  
進むにつれて気候も故郷の村と比べると暖かくなってきていたので  
問題も無く、天候も大きく崩れる事が無かったので快適に過ごせた。  
そんな旅を続けること、2週間、目的の港町が見えてくる。その町  
は今迄の町と比較すると数倍の規模があり、町と言うよりは街と言  
った方が良い大きさだった。街を囲む塀と言うよりは石垣は高く、  
とてもじゃないが飛び越える事は出来そうも無い。門前に居る守衛  
も数が多く、手分けして街に入る人々の身分証明書を確認している。  
守衛の数が多いのは、守りを固めるといよりは街に入る人の数が  
多いからかもしれない。今迄見てきた町とは比較にならない位の人  
数が入りしているのが見えた。

「すごいヒトだね・・・絶対踏み潰されちゃうよ」

歩きながら目の前の人々を見ていた黒炎が困った様に言う。ダスク  
も同じ様な事を考えていたのだろう、頷いて考え込む。

「最初から肩に乗らないと危ないな。いきなり目立つちゃうけど言  
葉を話さなければ大丈夫かな」

「そうだね、ガマンするよ。ボクだって最初の町の様な事はコリゴ  
リだし」

門の上の街の名前が読める位近くまで来たダスクは少しかがむと肩  
に黒炎を載せる。近くに居た旅人達は驚いた表情になっていたが、  
黒炎が無言で居た為、動物を肩に載せた面白い人物という印象だけ  
受けて微笑ましそうに眺めていた。

「なるほど、この街はシアネットっていうんだな」

門の上を眺めながら街の名前を読んでいたダスクは呟く。視線を上  
げていたダスクの前で行商人らしき人がチェックを済ませて街に入  
って行った事に気が付かないダスクに、黒炎は声を出す代わりに前  
足で兜を叩いて知らせる。驚いた様子で黒炎を見るダスクであった  
が、守衛の視線が自分に向けられているのに気付いて慌てて身分証  
明書を出す。無事に確認が終わって街に入ったところで感謝を示す

為にダスクは黒炎の身体にポンポンと触れた。

「これからどうしようかな」

そう呟くダスクは傾いた陽に照らされて鎧が赤い光を反射している。周りの人々も宿や我が家へ急ぐ為に早足になっていた。とりあえずの目的地に到着したのに野宿するのも嫌だったが、最初の町の事が脳裏に浮かんで足が止まる。

コンコン

兜を叩く音が再び耳元で響いて驚いたダスクが音の発生源に視線を向けると、黒炎が兜を叩いた前足を何かに向けているのが見える。何だろうと思つてその方向を見ると、魚介類のモノと思われる串焼きの屋台がある。そちらからはタレが香ばしく焼ける匂いが漂ってきており、気が付くと頭の後ろからお腹の鳴る音が聞こえてきていた。しょうがない、と思いつつ、悩んでいてもしょうがないと思つたダスクは、笑顔になつて黒炎に頷いた。

「了解。とりあえず串焼きをいくつか買つて少し早い晩飯にしよう」その言葉に、ダスクからは見えなかったが黒炎の尻尾は嬉しそうに振られていた。

屋台で串焼きを買つたダスク達は、人気の無い場所に移動する。黒炎の分を皿に置いて渡すと、ダスクは自分の分にかぶりついた。港町らしく食材は新鮮で、少しくセはあるが魚の匂いにするタレを浸けて焼いてある。焦げ目がつくまで焼いてあるので香ばしさもあつて実に食が進む。水筒の水を黒炎と分けて飲むと満足そうに息を吐いた。

「これからどうする？」

「うーん、前は辺りが真っ暗になるまで宿を探さなかったからダメだったんじゃないかな」

「そうかもしれない。」

あの後通つてきた町で見たけど、宿とかの店にはちゃんとした看板が出てるから大丈夫か」

「うん。表通りの雰囲気良さそうな宿屋を選べばいいんじゃない

かな」

「そろそろ行くか。このくらいの時間なら黒炎は肩に乗らないでも大丈夫そうだ」

「ちゃんと部屋で眠れるといいね」

食事の後片付けをして立ち上がると、ダスク達は連れ立って表通りへと向かう。表通りは街に到着した時と比べると人通りも減っているが、未だに屋台も多く、ランプの灯りで照らされていて明るい。宿屋も含めて店の客引きも多く、ダスク達は少し緊張しながら通りを歩く。しばらく歩いたところで、通りの端に良さそうな雰囲気のある宿屋があるのに気が付いたダスクは、黒炎を促して宿屋の前に向かった。どうしようかと迷っていると、店内から小さな女の子が突然飛び出して来る。目の前に現れた大きな黒い塊にも見えるダスクの姿に驚いた女の子は躓いてしまった。

「きゃっ」

危ういところでダスクが受け止める。何が起こったか分からない様子だった女の子が、自分を受け止めているダスクを見て泣きそうになる。焦ったダスクは急いで兜を脱ぐと、笑顔になって女の子の目を見る。

「ごめん。大丈夫かい？」

出てきた優しそうな瞳を見た女の子はかるうじて泣くのをこらえる。黒炎はその様子を見て、笑いをこらえる様に身体を少し震わせていた。ダスクは受け止めていた女の子をしっかりと立たせると、視線を合わせる為に膝を地面につく。

「君はここの子かい？僕達はここに泊まりに来ただけど大丈夫かな？」

「だいじょうぶだよ。おとうさんとおかあさんがおきやくこないかなっていった」

「そっか、ありがとう。君のお父さんかお母さん聞いてみるよ」  
「うん。このワンちゃん？あとでナデナデさせてねっ」

そう言ってニッコリ笑うと通りのどこかに走って行ってしまった。

「ボクはワンちゃんじゃないんだけどなあ」  
どこか不満そうな様子の黒炎を促して宿屋の扉へと向かう。

ギィ

軋むような音を立てて扉を開くと、目の前にはテーブルとイスが並んでいる。しかし、ここは宿屋の宿泊客専用の食事処のようで、落ち着いた様子で食事をしている人がちらほらと座っている。その奥にはカウンターがあり、先程の女の子の父親らしき男性が立っている。受付がそこだと判断したダスク達は、テーブルの間を歩いてカウンターの前に立った。

「いらつしゃい。お客さん、一人かい？」

「はい。あと連れがここに」

そう言つてダスクが、男性改め宿屋の主人に指し示したのは、他の宿泊客が食べているスープを物欲しそうな様子で見ている黒炎の姿であった。それを見た宿屋の主人は、少し渋い顔になる。

「うーん、ウチでは動物はちょっとな」

「そこをなんとかお願いします」

頼み込んでいるダスクの様子が気になったのか、配膳をしていた女性、おそらく女の子の母親だろう女性が近付いてくる。

「どうしたんだい？あー、この綺麗な黒い毛皮だね。艶々して光ってるよ」

自慢の毛を褒められた黒炎は、嬉しそうに尻尾を振る。それを見て笑顔になった女性は黒炎の頭を撫でた。

「いや、このお客さんがその動物と一緒に泊まりたいって言うんだが」

「あら、いいじゃない。身体は綺麗だし、あたしは構わないよ」

「おまえがそう言うならいいか。お客さん、泊まっていきな」

「ありがとうございます。出来れば1階の部屋が良いのですが、空いていますか？」

「ん？空いているよ。かあさん、案内してやんな」

「はいよ。さあ、ついて来て下さいな」



ダスク達を促して先に立って歩いていく女性改め宿屋の女将は、階段の横を通って廊下を進む。行き止まりまで来たところで止まると、扉を示して鍵を渡してくれた。

「はい、これが部屋の鍵。」

荷物を置いたらもう一度カウンターの所に来てくれるかい？宿帳にサインしてもらおうからね」

「分かりました。あ、さっきはありがとうございました」

「いいんだよ。困っている時はお互い様さ」

笑顔でそう言う宿屋の女将は満足そうに廊下を戻っていった。それを見送ったダスク達は、扉の鍵を開けて部屋へと入る。部屋にはベッドが一つと窓際にテーブルとイスが1セットあり、全体的に清潔感の有る内装で宿屋の主達の人柄おもてなしが出ているようであった。

「ふう、良かったね。ボクのせいで泊まれなかつたらどうしようかと思っただ」

「良い人達だよ。最初のやりとりも悪意のあるものじゃなかった」

「終わり良ければ全て良し、ってやつだね」

「だな」

会話をしながら外していた装備を床が頑丈そうな場所に並べる。動きやすい服装に着替えたダスクは、黒炎に視線を向ける。

「とりあえず戻ろうか」

「うん。美味しそうなスープがあったけど、食べられるのかな？」

「まだ食べるんだ？まあそれは戻った時に聞いてみよう」

「やった、よろしくね」

軽い足取りで廊下へと向かう黒炎を追いかけて扉を開けたダスクは、黒炎を先に通してから出ると、しっかり施錠をしてからカウンターのある方へと向かう。カウンターの前に到着すると、戻ってきていた女の子の声が待っていたかの様に、ダスク達というよりは黒炎を出迎える。

「あっ、ワンちゃんだ」

駆け寄ってきた女の子は黒炎に抱きつくくと、艶やかな毛を揉みくち

やにする勢いで撫でる。その勢いに萎縮いしゆくしたように固まった黒炎は、なすがままに撫でられ続けていた。

「すまん、お客さん。ウチの子は動物が好きでな」

「いいんですよ。それで宿帳にサインすればいいんですよ」

「ああ、これだ。ここんとこにサインしてくれ」

「はい・・・これでいいですか？」

「おお、ありがとよ。宿代は今もらうけど、食事とかはどうする？」

「あ、お願いします。今食べる物と明日の朝食、両方彼の方ももらえると助かります」

「あいよ、そいつの分は娘に免じてサービスにしとくから、全部合わせてこれくらいだ。」

「おい、かあさんちよつと来てくれ」

料金を払っているところで宿の女将が来ると、娘に揉みくちやにされる黒炎を見て笑顔になる。

「なんだい？ああ、あんた達か。もちろん食事はするだろ？」

「ああ、おまえが二人分用意してやってくれ」

「よろしくお願いします。あと彼の分は熱々にして下さい」

「熱々でいいのかい？それじゃあそのテーブルに座って待つてな指し示す場所に移動してイスに座ったダスクは、女の子にくつつかれたままヨロヨロとその傍に座る黒炎を見て、内心でご苦労様と伝える。少して料理を運んできた宿屋の女将はダスク達の前にそれぞれ置くと、未だに黒炎にくつついている娘の頭に手を乗せて撫でる。

「ほら、ワンちゃんもご飯食べるんだからそのへんにして部屋に戻つていなさい」

「ええ、まだいつしよにいたいよ」

「お前もご飯の邪魔をされたら嫌だろ？ワンちゃんに嫌われてもいいのかい？」

「きらわれたくないからへやにもどるっ」

「良い子だね。戻ったらすぐ寝れるように歯を磨くんだよ」

「うんっ」

頭を撫でてくれる母親に笑顔を返してから黒炎の頭をもう一度撫でると、走って階段の上に消えていった。宿屋の女将はしょうがないな、という表情で見送ると、すまなそうな顔をダスク達に向ける。

「ごめんなさいね。あたし達が忙しいから構ってやれなくて」

「気にしないで下さい。それじゃあ温かいうちに頂きますね」

「そうしておくれ。このスープはあたしの自慢の料理の一つなんだよ」

笑顔になつてそう言った宿屋の女将は、娘と同じ様に黒炎の頭を撫でてから自分の仕事に戻って行った。

「「いただきます」」

周囲に人が居なくなつたところで、顔を見合わせて小さな声で言ったダスク達はスープを一口飲む。その瞬間再び顔を見合わせる。両者とも少し驚いた顔をしていた。

「美味しいな」

「おいしいね」

魚介の旨みがふんだんに溶け込んだスープは、あっさりとした味付けであつたが今迄食べた事が無い位の美味しさであつた。その後は、勢い良く食べ続け、ダスク達は追加料金を払つてお替りまでしてしまった。カップの水を飲んで、お腹を満足そうに押さえたダスクは、黒炎を促して部屋へと向かう。

「ごちそうさまでした。本当に美味しかったです」

「ありがとね。そう言つて貰えると嬉しいよ」

途中ですれ違つた宿屋の女将とそんな会話をしてから廊下を進み、部屋の鍵を開けると黒炎に続いて部屋に入って施錠をする。そこでふと考えたダスクは、左手で持っていた装備を拾つと、扉の前に立て掛けるようにして置く。それを見ていた黒炎は、同意するような素振りをダスクに見せた。

「何もないと思うけど、やっておくにこした事はないよね」

「まあ、一応の用心の為だよ。別に宿の人達を疑っているわけじゃ

ない」

「ボク達も知らないことが多いから、経験したことは生かさないとね」

「それじゃあ寝ようか。明日は王都に行く船を捜さないといけないし」

「うん。ひさしぶりの室内なんだからしっぴかり寝ないともつたいないよ」

ダスクは背囊から毛布を出すと、いつもは上に被っていた物を綺麗に掃除された床に敷いて黒炎の寝床を作る。嬉しそうにその上で黒い毛玉になると、あつという間に眠りに落ちる。その様子を笑顔で見っていたダスクは、ベッドに入って布団を被ると、その暖かさと柔らかさで同じ様にすぐに眠りに落ちていった。

コンコン、コンコン

カーテンから朝の太陽の光が漏れ、外からは小鳥の鳴く声が聞こえて来る室内に、扉をノックする音が響いてくる。ダスク達はノックの音をうるさがる素振りは見せるが、全く起きる気配が無かった。ノックの主はこれだけじゃ足りないと思ったか、大きな声で起こそうとする。

「お客さ〜ん、起きて下さいな。朝食の時間だから、起きてこないと食いつぱぐれるよ」

その言葉に反応した黒炎はゆっくり立ち上がると、大あくびをしてから出来るだけダスクに似せて答える。

「オキマシタ、スグイキマス」

声の様子が変だと感じたが、扉越しだったのでそう聞こえたと思った宿屋の女将は、起きたのが確認できた事に満足したようであった。「待つてるよ」

その一言残して戻って行った。

「起きてよダスク。ねえ、起きてったら」

以前の様に絞め殺されそうになる事に用心をして、緊張しながら前

足でダスクの顔を押す。しばらくは嫌がって払い除けていたが、繰り返しているうちに目が覚めてきたのだろう、突然目を開けてガシツと黒炎の前足を掴む。何かされるんじゃないかとビクビクしていた黒炎であったが、ダスクはそれが黒炎の足である事に気が付くとあっさりと離してくれたので、ホツと一息吐いた。

「おはよう。起こしてくれてありがとな」

「うん、おはよ。女将さんが朝食だつて、呼びに来たよ」

「そっか、顔を洗って早く行こう」

そう言ったダスクは、備え付けのタライに水を入れて顔を洗うと、背囊から出しておいた手拭いで顔を拭く。ついでに手拭いで嫌そうにする黒炎の顔を拭ってから食事処に向かった。食事処には数人の宿泊客が既に来て朝食を食べており、手にしている焼きたてのパンの香りが実に美味しそうである。入ってきたダスク達に気が付いた宿屋の女将が笑顔で近付いてくる。

「おはようさん。あんたさつき声がおかしかったけど大丈夫かい？」

「え？ああ、寝起きはいつも声の調子がおかしいんです。心配させてすみません」

「なんだ、それなら良かった。さあ、席に座りな」

促されて席に座ったダスクは、宿屋の女将が離れて行ったのを確認してから顔をしかめて黒炎を見る。黒炎は笑いたいのをこらえる様に身体を少し震わせていた。

「女将さんにしゃべったのかい？」

「しょうがないじゃん。キミが起きなかつたんだから。あのままだと入って来そうだったし」

「むう」

声を抑えて話していると、宿屋の女将が朝食を持って来るのに気が付いたので会話を終わらせる。良く見ると、その後ろには宿屋の女将の娘が一緒について来ていた。

「すまないけど、一緒にいいかい？」

「ワンちゃんといっしょにたべるっ」

そう言つてテーブルの端に座っているダスクの正面の席に女の子は座る。身構えていた黒炎であつたが、席に座つた女の子を見て安心して緊張を解く。

「構いませんよ。食事中に邪魔をしなければ黒炎も怒りませんから」「ありがとよ。あなたにはパンを、ワンちゃんにはハムをサービスしとく」

「ありがとうございます。それでは頂きますね」

「いただきます」

元気良く言つて食べ始める娘の様子に笑顔になつた宿屋の女将は、自分の仕事をする為に戻つて行つた。食事を済ませ、しばらく女の子に撫で回される黒炎を笑顔で見ていたダスクは、気が済んだ女の子が友達と遊びに行くのを見送つてから黒炎と一緒に部屋に戻る。少し食休みを入れてから身支度を整えると、ダスク達は部屋を出てチエックアウトの為にカウンターへと向かつた。

「お世話になりました」

「また来てくれ。娘もまた会えるのを楽しみにしてると思う」

「はい。いつかまた近くに來たら寄らせてもらいますね」

「まいど、待つてるぜ」

笑顔で見送つてくれる宿屋の主達に手を振つたダスクと、同じ様に尻尾を振つた黒炎は、王都行きの船を捜す為に港へと向かう。港への行き方はチエックアウトの時に宿屋の主人に聞いてあつた。教えられた通りに道を辿ると、段々潮の匂いが強くなってくる。

「コレって何の匂いだろう？」

「多分、宿屋の人が言つた潮の匂いつてヤツじゃないかな。海の近くは独特の匂いがするらしい」

「へえ、これが海の匂いなんだ。変わつてるな」

周りに人は居なかつたが、ダスク達は声を抑えて会話をしていた。しばらく進んだところで急に視界がひらける。そこには朝日を浴びて輝く海面と、海鳥がたくさん止まっている大小様々な船が停泊していた。

「うわっ、これが海なのか。デツカイ水溜りだね」

「話には聞いていたけど、実際に見ると本当に大きいな」

驚きのあまり立ち止まってしまったダスク達は、しばらくそのまま魅せられた様に海を眺める。少なくとも時間そうしていたが、ふと当初の目的を思い出したダスク達は少し首を振って気持ちを切り替える。

「さあ、船を捜そうか。うまく王都行き船が見付かるといいけど」「ダイジョブ、ダイジョブ。きつと見付かるよ」

それからダスク達は、停泊している船を一つ一つ回って目的地と自分達が乗れるかを聞いていった。回り始めた辺りの船は白く塗装されており、海の青さに映えて美しい光景を見せている。ある程度回ったところで、近くの屋台で飲み物を買うと、人気の無い場所に行つて腰を下ろした。日当たりの良い港は気温も高めで潮風もあり、すぐに喉が乾いてくる。ダスク達は美味しそうに飲み物を飲むと、疲れた風に溜息を吐いた。

「なかなか王都行き船って無いな」

「そうだね。あつてもちよつと小さい感じだよ」

「うん、この後は大きめの船だけ回ってみようか」

「それがいいかも。全部まわつてたら夜になつちゃうよ」

改めて方針を決めたダスク達は大きめの船を選んで回り始める。いくつか回つたところで王都行き白い中型の船が見付かり、船長とダスクが話している途中で不意に黒炎がダスクの脚を前足でつつく。ダスクは船長に頭を下げて離れると、少し不機嫌そうに小さな声で黒炎に話しかける。

「なんだよ、せっかく船が決まりそうだったのに。何か急ぎの用なのか？」

「うん。ほら、あつちを見て。あつちにキミが乗つてもびくともしなそうな船が並んでるよ」

そう言つて前足で指し示す方向を見たダスクの目には、大型の船がいくつも並んでいる光景が見える。その色は、今まであつた大多数

の白い船とは違い、赤く塗ってあり、とても目立つ様子であった。

「大きいな。確かにあれなら僕が乗っても大丈夫そうだけど、王都に行くのかな？」

「とりあえず聞いてみればいいんじゃない？」

「それもそうか。聞いてみて駄目だったらさっきの船長さんに頼んでみよう」

そう決めたダスク達は、赤い船へと向かう。船に近付いていくと都合良く船長らしき格好をした人が降りてくるのが見える。その人物に駆け寄ってみると、小麦色に日に焼けた肌で今迄あまり見なかった髪や瞳の色をしているのが確認出来た。短く刈った髪の毛は陽光を受けて輝く銀色をしており、瞳は金色に見える。こちらに気が付いたその人物は、不思議そうな顔で黒でまとめられたかの様なダスク達を見る。

「キミタチはワタシにナニかヨウですか？」

不思議な発音の言葉に躊躇ちゆうじゆしていたダスクだったが、黒炎が催促する様に脚をつつくのの後押しされて船長らしき人に視線を向ける。

「この船は王都に向かいますか？それと、僕達を乗せてくれますか？」

「オウト？ハイ、いきますヨ。キミタチはオキヤクですか。ノルならこれクライひつようデス」

「やった、乗れるんだ！あ、すみません。すぐに乗りたいです」

「まいどデス。スグにシュッコウしますから、アソコのセンインにオカネはらってクダサイ」

そう言うと、船長は甲板に続く階段の近くに居る船員に手を振って合図する。ダスク達は船長にお辞儀をして別れると、船員に代金を払って船に乗り込んだ。船員はこの街でよく見る髪や瞳の色で、言葉も普通の発音で話していた。ちなみに黒炎は大型手荷物（笑）としての料金であった。

甲板に昇ると意外と高い位置にあり、港が一望出来る。眺めの良さで初めての船に興奮したダスク達は出航するまでそのままの場所



で目に飛び込んでくる景色を眺めていた。

とうとう船に乗り込んだダスクと黒炎は無事に王都に辿り着けるのだろうか。波も穏やかで風も追い風が吹き、滑らかに進む赤い船はこの先の航海の無事を暗示している様で、ダスク達は楽しい気分  
で遠くなる港町に別れを告げていた。

無知と出会い（後編）（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3682y/>

---

それは黒くて重かった

2011年11月27日00時52分発行